

松本市文化財調査報告No.21

# 松本市笹賀神戸遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1981.3

長野県中信土地改良事務所  
松本市教育委員会

# 松本市笹賀神戸遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1981.3

長野県中信土地改良事務所  
松本市教育委員会

## 序

神戸遺跡は笹賀地区のほぼ中央に位置し、かねてより埋蔵文化財の包蔵地として知られておりましたが、この度当地域を含めて県営は場整備が行われることとなり、長野県中信土地改良事務所より本市に調査の委託がなされたものであります。

市教育委員会では日本考古学協会の久保知巴氏に調査団長、地元研究者の方々に調査員をお願いして調査団を編成しました。

調査は11月はじめより、12月末近くまでの長期にわたり、降雪や凍てつく寒さの中で続けられ、平安時代の焼失住居を含む二軒の住居址と、同時代と思われる鍛冶屋場遺構、墓址20数ヶ所など、予期以上の成果をあげることができ、調査団長以下のご努力によりこれらの結果をまとめたものが本書であります。この報告書が今後、地域の歴史の解明と、文化財保護の気運の醸成の一助になれば幸甚であります。

終りにあたり、今回の調査に全面的にご理解、ご協力をいただきました地元関係各位に心からなる謝意を表して序といたします。

昭和56年3月

松本市教育委員会

教育長 中島俊彦

## 例 言

- 1 本書は昭和55年11月10日より12月23日にわたって行われた松本市笹賀・神戸遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は松本市が長野県中信土地改良事務所より委託をうけ、更に神戸遺跡調査会（会長 大久保知巳）に再委託をして行ったものである。
- 3 本書の執筆は各調査員が分担して行い、文責は文末に記した。また執筆にあたり森 義直、直井雅尚、吉田浩明、小口妙子、三村竜一の教示、援助を得た。
- 4 本書の編集は事務局が行った。
- 5 遺物の整理、図類の整理については次の者が行った。  
復元 滝沢智恵子、篠宮 正、事務局  
実測・トレース 篠宮 正、小口妙子、吉田浩明、高桑俊雄、直井雅尚  
遺構図整理 事務局
- 6 写真撮影は遺構、遺物とも事務局が行った。
- 7 出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

# 目次

## 序

## 例言

## 第1章 調査

第1節 発掘調査に至る経過	1
---------------	---

第2節 調査日誌	2
----------	---

## 第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡付近の自然環境	7
---------------	---

第2節 周辺遺跡	7
----------	---

## 第3章 調査結果

第1節 調査の概要	9
-----------	---

第2節 遺構と遺物	11
-----------	----

1 第1号住居址	11
----------	----

2 第2号住居址	16
----------	----

3 かじや場及び関連遺構	19
--------------	----

4 墓址	26
------	----

5 遺構外	41
-------	----

6 陶磁器	49
-------	----

7 鉄器・石器	49
---------	----

8 その他の遺物	55
----------	----

9 人骨	55
------	----

## 第4章 調査のまとめ

第1節 長野県内における平安時代の「火災住居」をめぐって	69
------------------------------	----

第2節 出土土器、陶器について	77
-----------------	----

第5章 結語	81
--------	----

## 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡および発掘地点……………6	第21図	第17・18号基址出土遺物実測図……………37
第2図	神戸遺跡調査地点位置図……………10	第22図	第20号基址出土遺物実測図(1)……………38
第3図	発掘地点全体測量図……………11	第23図	第20号基址出土遺物実測図(2)……………39
第4図	A・B・C地区平面図……………12	第24図	第20号基址出土遺物実測図(3)……………40
第5図	第1号住居址実測図……………13	第25図	遺構外出土遺物実測図(1)……………42
第6図	第1号住居址出土遺物実測図(1)……………14	第26図	遺構外出土遺物実測図(2)……………43
第7図	第1号住居址出土遺物実測図(2)……………15	第27図	遺構外出土遺物実測図(3)……………44
第8図	第2号住居址実測図……………17	第28図	遺構外出土遺物実測図(4)……………45
第9図	第2号住居址出土遺物実測図……………18	第29図	遺構外出土遺物実測図(5)……………46
第10図	かじや場遺構実測図……………20	第30図	遺構外出土遺物実測図(6)……………47
第11図	かじや場遺構遺物出土状況図……………21	第31図	遺構外出土遺物実測図(7)……………48
第12図	かじや場遺構出土遺物実測図(1)……………23	第32図	陶磁器実測図(1)……………50
第13図	かじや場遺構出土遺物実測図(2)……………24	第33図	陶磁器実測図(2)……………51
第14図	かじや場遺構出土遺物実測図(3)……………25	第34図	鉄製品実測図……………52
第15図	第1～5号基址実測図……………31	第35図	石器実測図……………53
第16図	第6～11号基址実測図……………32	第36図	その他の遺物実測図……………54
第17図	第12・13・15～17号基址実測図……………33	第37図	鉄滓出土分布図……………56
第18図	第18・20・21号基址実測図……………34	第38図	火災住居例実測図……………75
第19図	第5・6・9号基址出土遺物実測図……………35	第39図	坏・皿・埴寸法図……………77
第20図	第16号基址出土遺物実測図……………36	第40図	坏・皿・埴分類図……………80

## 表 目 次

第1表	遺構一覧表……………57	第5表	長野県における平安時代の火災住居一覧……………70
第2表	遺物一覧表……………58	第6表	坏・皿・埴分類表……………79
第3表	陶磁器一覧表……………66		
第4表	鉄製品・石器等一覧表……………67		

## 図版目次

第1図版 発掘地点全景(1)……………85	第26図版 第2号住居址出土土器(1)……………110
第2図版 発掘地点全景(2)……………86	第27図版 第2号住居址出土土器(2)……………111
第3図版 第1号住居址(1)……………87	第28図版 かじや場遺構出土土器(1)……………112
第4図版 第1号住居址(2)……………88	第29図版 かじや場遺構出土土器(2)……………113
第5図版 第2号住居址……………89	第30図版 かじや場遺構出土土器(3)……………114
第6図版 かじや場遺構(1)……………90	第31図版 かじや場遺構出土土器(4)……………115
第7図版 かじや場遺構(2)……………91	第32図版 かじや場遺構出土土器(5)……………116
第8図版 墓址(1)……………92	第33図版 第16号墓址出土土器(1)……………117
第9図版 墓址(2)……………93	第34図版 第16号墓址出土土器(2)……………118
第10図版 墓址(3)……………94	第35図版 第16・18号墓址出土土器……………119
第11図版 墓址(4)……………95	第36図版 第20号墓址出土土器(1)……………120
第12図版 墓址(5)……………96	第37図版 第20号墓址出土土器(2)……………121
第13図版 墓址(6)……………97	第38図版 第20号墓址出土土器(3)……………122
第14図版 墓址(7)……………98	第39図版 第20号墓址出土土器(4)……………123
第15図版 遺物出土状況(1)……………99	第40図版 遺構外出土土器(1)……………124
第16図版 遺物出土状況(2)……………100	第41図版 遺構外出土土器(2)……………125
第17図版 発掘寸描……………101	第42図版 遺構外出土土器(3)……………126
第18図版 第1号住居址出土土器(1)……………102	第43図版 遺構外出土土器(4)……………127
第19図版 第1号住居址出土土器(2)……………103	第44図版 遺構外出土土器(5)……………128
第20図版 第1号住居址出土土器(3)……………104	第45図版 遺構外出土土器(6)……………129
第21図版 第1号住居址出土土器(4)……………105	第46図版 遺構外出土土器(7)……………130
第22図版 第1号住居址出土土器(5)……………106	第47図版 遺構外出土土器(8)……………131
第23図版 第1号住居址出土土器(6)……………107	第48図版 遺構外出土土器(9)……………132
第24図版 第1号住居址出土土器(7)……………108	第49図版 遺構外出土土器00……………133
第25図版 第1号住居址出土土器(8)……………109	第50図版 遺構外出土土器01……………134

# 第1章 調 査

## 第1節 発掘調査に至る経過

昭和54年度に続いて55年度も笹賀地区において圃場整備事業が行われることとなり、昭和54年10月、県文化課指導主事、中信土地改良事務所職員らと共に市教委・市農政部職員が現場で打合せをし、55年秋に発掘調査を行うこととする。

発掘調査費は総額400万円。うち教育委員会負担分は80万円で、そのうち50%の40万円が国の補助、15%の12万円が県補助金、市費が28万円である。市教委では直営での発掘調査が行えないので日本考古学協会の大久保知巳氏に調査を再委託した。

### 調査体制

団 長	大久保知巳	国鉄職員	日本考古学協会員
調 査 員	倉科 明正	農業	日本考古学協会員
	西沢 寿晃	信大教員	日本考古学協会員
	太田 守夫	元校長	
	森 義直	高校教諭	
	三村 肇	会社員	長野県考古学会員
	熊谷 康治	日本民俗資料館職員	長野県考古学会員
	山越 正義	中学校教諭	長野県考古学会員

### 協力者

岩垂隆彰、丸山増美、高橋宗晴、宇治 岬、宇治いとえ、伊藤ときわ、大槻幸子、岩垂葉末、小沢けさ子、大槻勝子、宇治妙子、伊藤崎子、高山三千彦、岩垂なお、高山敏子、平林亮吾、高山ふみ子、高山元枝、中村慎子、原 幸、三村健一郎、三村郷美、岩垂千登世、小沢よしあ、小沢つやあ、原 静子、原 公雄、大島かの、神戸源一、丸山早苗、太田好子、堀内逸侯、古町真寿雄、古町澄子、島田富子、赤羽八江子、古町 恵、島 けさみ、上条水美、宮島茂雄、藤井征男、小松彦衛、小松志げみ、上条沙千子、堀内五百子、上条清春、西村 勲、堀内忠吾、上条公子、開島 暁、滝沢智恵子、堀内喜代子、古町正夫、島 作雄、開島律子、花村久子、百瀬泰隆、宮島園子、小口妙子、三村竜一、山田真一、中堀雅英、丸山 浩、塩原博之、土橋伸子、矢花利幸、百瀬浩子、薗 国政、額川長広、吉沢西己、上野正春、小林せつ子、柴田尚子、横田作



重、伊藤慎治、松下力三、武井保典、宇治清子、伊藤真由美、宇治貞子、光成和也、岩村孝康、河合 光、関 浩一、古町寿雄、桜井義治、坂本賢一郎、水上康明、倉田俊樹、最上聖子、神田やすよ、丸山敬明、寺村 裕、横川豊英、市川尚文、堀内俊男

事務局

田堂 明 (社会教育課長) 神沢昌二郎 (社会教育課文化係長) 大日向栄一 (同 主事) 原田美幸 (同臨時) 藤波由紀夫 (笹賀公民館主事)

## 第2節 調査日誌

55年11月10日(月)晴 団長立合いのうえ、ブルドーザーにより発掘地点の表土除土。発掘予定範囲地域内のうち、西南部分を中心部と決め、南北に走る水路道路を境として、西側よりA、B、Cの各地区と定める。本日はA地区を東西約50m×南北約30mの範囲の表土を平均50cmの厚さではぐ。遺物は-35cm程の黒褐色土層中より中世陶器片が数片発見された程度である。

11月11日(火)晴 B地区をブルドーザーにより表土除土。中央部分より須恵器片出土。A地区のグリット設定。(一辺5mのグリットとする。25×40mである。)

11月12日(水)晴 B地区東側表土除土。A、B地区のグリット設定。B地区は40×45mである。

11月13日(木)曇、朝一時雨 A地区、A-4・7、B-5グリットの発掘を行う。ベンチマーク設定。本日より地元の方々も参加。

11月14日(金)晴 C地区の表土除土。A地区、A-4・7グリット完掘。B-5、C-6グリット掘りすむ。

11月15日(土)晴 本日で表土はぎ作業完了。A地区、A-1、B-2、D-7グリットの発掘作業。D-7グリットでは土師質土器出土。西側より小集石2ヶ所あり。またA-1の-31cmで土師質土器、B-2、-30cmの第3層中で須恵器検出。

11月16日(日)晴 A地区、A-1・7、B-2、C-3、D-4各グリットの発掘作業を行う。A-7は南と西へ1m拡張する。

11月17日(月)曇 B地区のC、D-4・5・6グリットの発掘作業。特にB地区D-5・6グリットでは表土除土後の表面及び-5cm位で、土師・須恵器・緑釉陶器片、鉄滓等が多量に出土。C-4~6、D-4グリットにおいても遺物検出。D-5・6グリット写真撮影。

11月18日(火)快晴 B地区、B、C-3~6、D-3、D~F-4各グリットの発掘作業。特にB-3グリットでは赤褐色土層より、土師、須恵(大甕)、灰釉陶器など多数出土。C-5・6グリットでも細かい遺物が出土する。B地区全体の写真撮影を行う。

11月19日(水)快晴 B~F-3~6、D-2、G-4の各グリットの発掘作業。C-5で磨

石、G-4で列石あり。E-3では褐色の落込らしきもの検出。他にB、C-5・6実測作業などを行う。

11月20日(木)晴、朝霧深し B、C-4グリット実測、遺物出土状況をとる。B-5、C-5・6、E、F-3、F-6の各グリットを浅く掘り下げる。B-2で灰釉陶器片出土。

11月23日(日)曇 前日の雨のため新しいグリットに手をつける。B地区A-3～6、C地区A-2、B-3、C-4、D-5グリットの調査。B-3では浅い位置に礫があり、C-4では灰釉陶器片4片を検出。

11月24日(月)曇後晴 B地点においてA-3・4、B-2グリットの測量を行なう。A-7、B-4～6グリットの掘り下げと、C-5・6グリットの掘り下げを行なう。C地点においてA-2、B-3、C-1、4、D-2・5、E-3・6、F-1・4などグリットの掘り下げ。特にD-2グリットでは石炭出土。またF-1グリットでは80cm位の集石あり。鉄器出土。なおA-5、C-3グリットの測量を行なう。

11月25日(火)小雨 B地点C-2・3グリットの測量を行なう。

11月26日(水)晴 B地点A-7、B-6、C-4、D-4各グリットの写真撮影と実測、掘り下げを行なう。

11月27日(木)晴後曇 E-2・3、F-2・3グリットの測量を行なう。H-3・4グリットの境で骨出土。B-7、C-2・7、H-2～4の各グリットの掘り下げを行なう。

11月28日(金)曇 夕方小雨 C-6、D-6グリットの土器だまりの全体調査と、H-2・3グリットの測量を行なう。

11月29日(土)晴 B地点C-5、H-2グリットの測量の残りを行ない、D-2・3、E-2・3、H-2グリットの掘り下げを行なう。またC-6、D-6グリットの土器だまりの測量を行ない、遺物を取りあげる。

11月30日(日)曇 A地点ではC-2・5、D-6グリットの掘り下げ。B地点では集石墓ではないかと思われるB-7及びD-2グリットの調査と、続きのC-6、D-6グリットの土器だまりの調査、E-2、F-2、G-2・3、H-3の実測及び掘り下げを行なう。

12月1日(月)晴 A地点ではD-6グリットの西南を拡張する。B地点ではD-2、F-2、H-3グリットの実測を行なう。

12月2日(火)晴 B地点のC-3、D、E-1グリット掘り下げ。D-6土器だまりは墓墳と判明、ここを清掃。G-2グリットでは土器だまり状の土師器、須恵器などを検出。

12月3日(水)晴 B地点でD-1・3グリットの測量。D、E-1グリット住居址の調査及びG-2グリットの土器だまりの調査などを行なう。D-1グリットの灰釉の写真撮影。

12月4日(木)晴 D、E-1グリットにかかる第1号住居址の精査と、D、E、F-2の各グリットの掘り下げ。E-6、H-2・4グリットの実測、掘り下げを行なう。

12月5日(金)晴 B地区内B列に東西、3列に南北と十文字にトレンチを掘って地層等を調べる。他にA-3~6グリット実測、H-4、F-4・5グリット実測。

12月6日(土)晴 B地区トレンチ掘りすゝめる。A-2、B-2~5、C-4~6グリットの実測を行なう。第1号住居址の調査を行なう。

12月7日(日)晴 B地区G、H-1グリットの拡張を行なう。なおH-1拡張部より刀子を検出した。

12月8日(月)晴 第1号住居址の西北を測量し、遺物のとりあげを行なう。この住居址は北から南へ倒れこんだように木炭化物が長くころがっている。鍛冶屋場であるD-4、E-5・6グリットの調査を行なう。なおG-7グリットで鐵を検出する。

12月9日(火)晴後曇 森先生により列石などの調査をお願いする。B地点C~Hの南北に走る溝状遺構の掘り下げ。G-6・7グリットの実測と鍛冶屋場であるG・H-1・2グリットの実測を行なう。

12月10日(水)晴 B地点第1号住居址の清掃と土手断面図をとり、後、土手とりはずし。鍛冶屋場の遺物取り上げ。C、D-6グリットの墓墳内遺物取り上げ。充形土師坏あり。

12月11日(木)晴 B地点東西、南北に切ったトレンチの断面調査を行ない、E、F-2・3グリットの測量を行なう。なお本日で地元の人達の作業を終る。

12月12日(金)曇後雨 昨夜来の雨が朝のうちは上っていたので作業を開始したが、再び降雨のため、10時すぎより笹賀出張所で遺物洗いと註記を行なう。

12月13日(土)曇 B地点第1号住居址の実測と主要遺物とりあげ。西壁4点セットの第2番目の下に坏1点あり。また炭化物については草状のものはムシロらしい。鍛冶屋場については銅の小玉の出た周辺より遺物が多い。G-2グリット掘り下げにより灰釉陶片が伏って出土。

12月14日(日)曇 C地点でC-4、D-5、F-1・4グリットの実測。B地点第1号住居址遺物取り上げ。

12月15日(月)曇 B地点E-6グリットの断面調査。F-1グリットの墓墳断ち切り。B-5グリットの墓墳と思われたものはカマドとなる。

12月16日(火)晴 B地点B-5の第2号住居址掘り下げ。A地区全体測量を行なう。

12月17日(水)晴 A地点C-3・4グリット実測。C-3グリットの墓墳断ち切り。

12月18日(木)晴 B地点B-7グリットの集石墓調査。古銭1枚と $\frac{1}{4}$ を検出、また焼土があり、この場所より多量の骨を検出した。他に西側集石墓の断面実測と、C、D-6グリットの墓墳の断面及び実測を行なう。本日でA地点完了する。

12月19日(金)晴 B地点D-4グリット断ち切り測図。F、G-5グリット集石墓の実測・断ち切り。どちらも更に10cm位下で、土師器、灰釉陶器片あり。生活面を感じさせる。

12月20日(土)曇 B地区鍛冶屋場遺構の実測と土器取りあげを行なう。

12月21日(日)晴 午前中は凍っていて仕事にならない。B地点第1号住居址清掃掘り下げ。第2号住居址床面が判然としない。集石墓の北に大石5ヶ出る。このあたりも一つの床面でもあるらしいが、その下にある面を本址の床面とする。

12月23日(火)晴後雪 B地点D-6グリット中央の遺物の実測。G、H-3グリットの溝中心に実測。第1号住居址の清掃、壁は東へ80 cm、南へ20 cm ひろがったところにある。写真撮影。本日で現場作業全て終了とする。

56年1月9日(金)より3月31日まで、土器洗い、土器復元、実測、遺構図、土器実測図トレス。原稿起稿、編集、印刷各作業を行なう。  
(事務局)



第1図 周辺遺跡および発掘地点 (○印)

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡付近の自然環境

本遺跡は松本市の西南に位置し、北流する奈良井川左岸の標高約640 mの平地にあり、周辺には人家・水田が連なっている。発掘地点は現状は水田であるが、奈良井川の第三段丘の沖積地にあり、緩く東北に傾斜している。本遺跡の南西600 mあたりまでは南北に大段丘が続き、それを乗り越えて鎮川の扇状地の扇端が本遺跡まで至っている。勿論奈良井川の氾濫による洪水のくり返しにより堆積物が乗っているため、岩石からみると圧倒的に奈良井川水系のものが多く、水田耕作はこれら氾濫原の礫層上にあるので、浅いところでは40~50 cm程度しか耕土がない。しかし、今回調査のA地点では耕土が深く、またC地点では浅いなど氾濫原は一様の高さでなく起伏のあることを窺わせる。洪水の方向は本遺跡より1 km南方の牛の川遺跡がおおよそW→Eであったのに対して、SW→NEであろう。奈良井川は上流今村橋あたりより神戸橋あたりまでは右岸が高く、ほとんどNWに向って溢水したと思われるが、西側にある鎮川の影響もつよくうけたものと思われる。

### 第2節 周辺遺跡

笹賀地区は南北に約8 km、東西に約2 kmと奈良井川に添って細長く、遺跡は縄文時代より平安時代頃までにまたがって存在している。まず南よりみると、今村の奈良井川左岸の第一段丘に柏木古墳があり、柏木保育園東南の教ヶ所の宅地、道路より加曾利E式、堀之内式土器の出土をみている。今村より約1.5 km下ると下小俣の集落があり、この平地に大塚古墳があったが現在は開田により消滅している。下小俣の東側に54年度調査を行った牛の川遺跡があり、東西150 m、南北350 mあまりの範囲のうち、調査箇所からは9軒の縄文時代住居址、古墳址1、平安時代住居址2などが検出されている。本遺跡をも含めて神戸地区では水道工事や建設工事の際20余箇所におわたって遺物の出土が記録され、全体として東西1.2 km、南北約1 kmの広範囲にわたる地域が遺跡としてとらえられよう。時期的には縄文・平安時代で主な出土地点は、菅野中学校東側、笹賀小学校（現松本短期大学）敷地、神戸橋に通じる県道などである。神戸集落の北端には神戸館址がある。

神戸遺跡より1 kmあまり北東に下ると上二子の集落がありここでも工事の際に8ヶ所から縄文、土師器の出土をみている。更に600 m程北へゆくと中二子遺跡、それより1 km北に下二子遺跡、奈良井川・鎮川との合流点西南の大久保原団地より、それぞれ縄文中期土器片、土師、須恵、灰釉

陶器片等の出土をみている。

これらの遺跡を総括してみると、遺跡は奈良井川左岸の段丘上に点々として存在しており、時代的には縄文・平安期が中心で弥生時代のものはない。それと共に地形はほとんど平坦であり、奈良井川との比高差が2～3 mと少い地点に縄文時代の遺跡がある点特徴的なものといえよう。

笹賀地区周辺の主な遺跡を拾いあげてみると、西隣の神林地区では南荒井・下神遺跡があり、下神遺跡は大久保原工場団地内の出土地点に近い。鎮川を渡ると神林梶海渡になるが梶海渡からも土師器の出土をみている。更に北の島立地区に入ると梶海渡続きの南栗神社周辺からは土師器や施釉陶器が採集されており、島内地区内の水田下でも工事の折に土師器などが採集されているので、奈良井川左岸は前記笹賀地区と同様に点々と遺跡が続いているといえよう。一方右岸についてみると芳川小屋の段丘上より縄文期打石斧、北へ下って野溝地区では土師・須恵器などが出土している。しかし、芳川平田をも含めて野溝の東側は明らかに田川流域圏に入るので、奈良井川右岸は遺跡が少いといえる。

なお今回調査地点は旧字名は三札であり、その西は宮添、長照寺、神戸神社地へと続く。三札には丸山姓が祀る元熊神社があり、その記録によると『天保三壬辰年太祖盛光公を祀って元熊大明神を尊称し、安政六己未年三月間口七尺五寸、奥行九尺の社殿を建立した……』と書かれているなど神社に関わりが深い。

(神沢昌二郎)

#### 参考文献

「松本市笹賀牛の川遺跡緊急発掘調査報告書」 松本市教育委員会 昭和55年3月

「松本市・塩尻市・東筑摩郡誌」 歴史上 松本市・塩尻市・東筑摩郡誌編纂委員会 昭和48年

## 第3章 調査結果

### 第1節 調査の概要

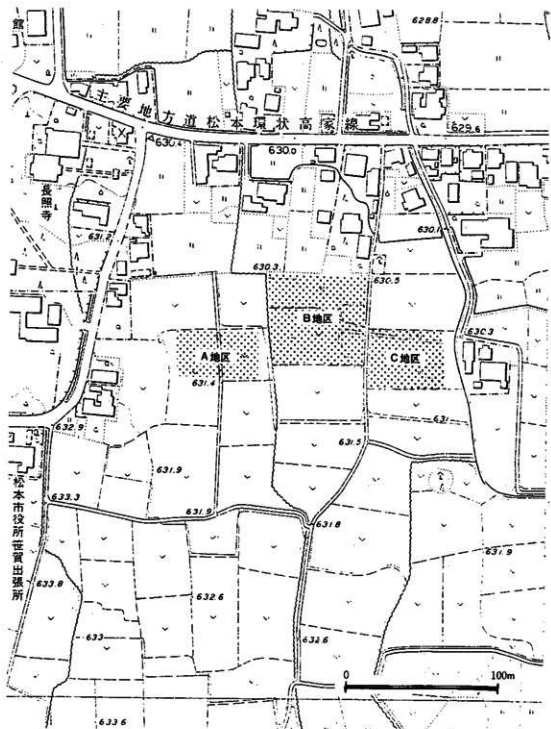
本遺跡は水道敷設工事により遺物検出箇所が多く知られており、また中学校東側の宅地より遺物の出土があったと報告されていたので、今回調査した箇所では果して遺構に当たるか不安があった。しかも、事前の表面採集では、かなり南側に多少の土器片を採集した程度であった。従って発掘地点設定には極力現民家寄りを調査したいという判断をもとに、二本の水路に囲まれたB地点を中心として選び、その西側をA、東側をC地点とし、各地点ともブルドーザーにより表土除土を行い、その後、5×5 mのグリットを設定して発掘調査にかかった。

**A地点** 本地点内で千島状に10グリットを掘る。本地点内の地層は西側で耕作土20 cm、黒褐色土23 cm、黄褐色土10 cm、計53 cmで礫を含む層に達する。遺物包含層はオII層の黒褐色土層の上より13 cmである。個々についてみると、A-1ではマイナス40 cmあまりで土師質土器片の検出をみ、僅かに炭化物の存在を確認したが、遺構としてとらえるにはいたらなかった。C-2では2基の墓址を検出した。一つは260 cm×100 cmの集石墓、他は130 cm×100 cmの集石墓である。いずれも遺物はなかった。C-6でも80 cmの円形の集石墓があったが、これも遺物はなかった。本地区は西に行く程浅く礫が厚く堆積していた。全体的にみて遺構・遺物の少いところであった。

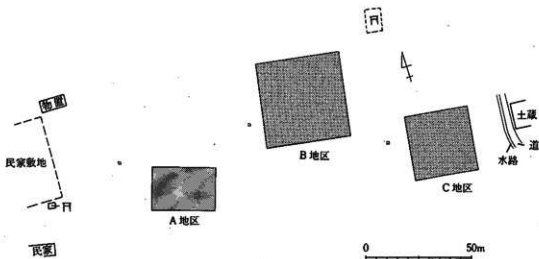
**B地点** 今回調査の主要地区である。40 m×40 mの64グリットを調査した。本地点の南西側はやや高く、南北に旧小川の砂利層があり、北へ行くに従って広がっていた。遺構は平安時代の住居址2軒とかじや場と思われる遺構1、火葬、土葬、集石等の差異はあるが墓址17基等である。本地区については後述する点が多いのでここでは省くが、全体としてみれば縄文時代の遺物が少しと、近世の陶磁器があったが、主のところは平安時代後半の遺構である。

**C地点** B地点東南側に10グリットをあけた。ここでは表土除土後は礫が多く、F-1で85 cmの円形の集石墓が1基検出されたのみである。遺物は鉄器1片があった。他にD-2より石鏃1、E-3の礫中より灰釉陶器の小破片1などである。E-6を1 m掘り込んでみたが人頭大からこぶし大の礫が多く、ここが河川の氾濫原であったことを示していた。





第2図 神戸遺跡調査地点位置図

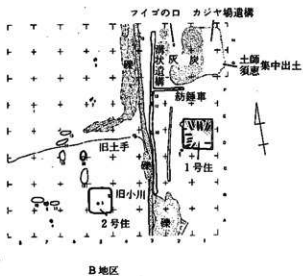
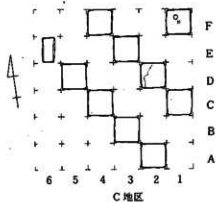
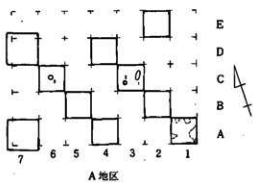


第3図 発掘地点全体測量図

## 第2節 遺構と遺物

### 1 第1号住居址 (第5-7図、第3・4・18-25図版)

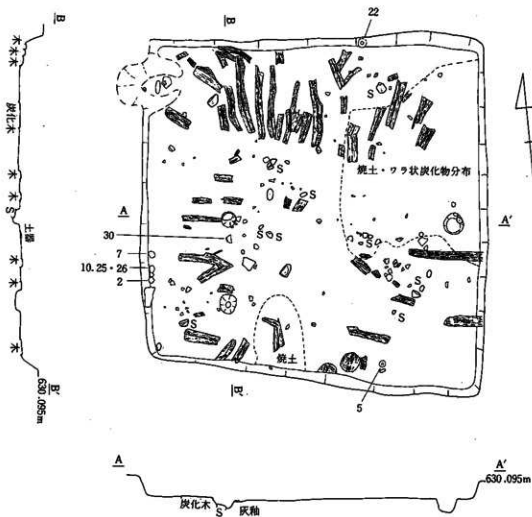
**遺構** B地点東側一帯にかけては表土除土から削平時に多量の土師器片を検出しており、本址はC・D-1に東西5.9m、南北6.3mのほぼ正方形の住居址が地表下約1mより検出された。主軸方向はN86°Wであり、壁は垂直に立ち上がり62cmの高さであった。カマドは北西隅寄りに砂質粘土のみでつくられてあり、その周辺には土師器破片が散在していた。煙道は不明であった。住居址内にはほとんど一面に炭化物があり、特に木材は柱又は板状で放射状にあり住居の焼失した状態を窺わせている。東北部では茅または葦状の炭化したものがあり、蓆様の敷物ではないかと思わせた。ピットは3本検出され、東壁寄りに35×40、-25cm、西寄りに2本並んで33×30、-12cm、25×25、-15cmで浅い。床面はしっかりしており水平である。遺物は覆土中における多量さから比べると床面密着のものは少ないが、西壁に置かれた杯は重ねられたままであり、また北壁では黒色土器がほぼ完形で出土している。



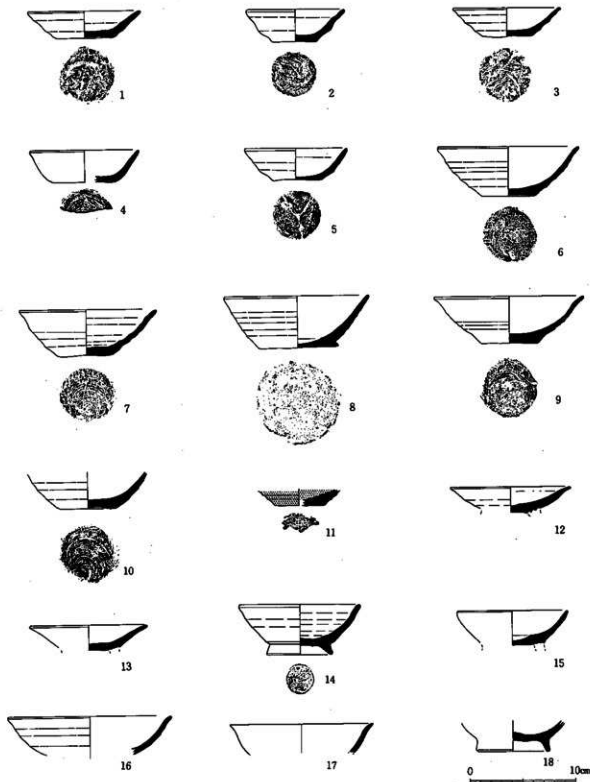
(図中のNo.は基址番号)

0 10m 20m

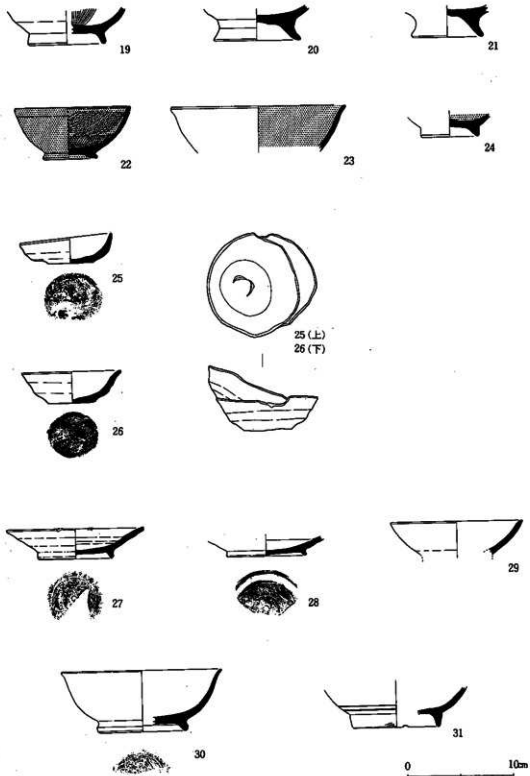
第4図 A・B・C地区平面図



第5図 第1号住居址実測図 (数字は出土遺物No.)



第6图 第1号住居址出土物实测图 (1)



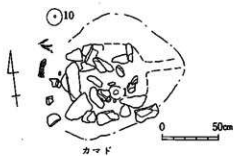
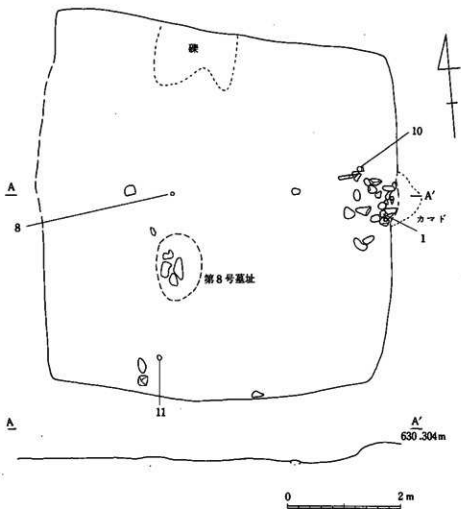
第7图 第1号住居址出土遗物实测图(2)

遺物 31点を図示した。内、土師器は坏15、皿2、埴9点。灰釉陶器は輪花皿1、段皿1、埴3である。坏が圧倒的に多く、いわゆる供膳形態のものばかりである。1～5はいずれも本遺跡で言えば一般的な大きさで、1は浅い坏であり、2は底部と外面に稜をもつもの、3は外面に2段の稜をもち、内面もろくろ引き跡のつよく残っているもの、4はやわらかな曲線をもつもの、5は3と似た二段の稜をもつものである。いずれも回転糸切り底であるが、5は切りはなし後調整が丁寧になされている。6～10はやや大き目の坏で、6は外面に5段の稜、7は3段の稜をもつもので内面口縁近くに稜をもって広がっている。8は外面に7mmピッチで稜をもち、底は糸切りが斜めに行われたため片側がはみ出している。内面底には円形の調整痕が残り、僅かに凹んでいる。9は丁寧なつくりで、外面4段、内面3段の稜を持つ。底部は糸切り後調整して底径がわかりにくい。10も同様のものであるが、外面には糸切りの糸がはねたようにとび上がっている。11は稜の強い黒色土器、12・13は高台のとれた皿で12は稜がつよい。14は高台をつけた埴で、内側底はもり上がっている。15は逆に内側底が渦巻状にくぼむ。16・17は口縁部破片。18～21は埴底部で、18の高台は短目で、内部底中央は盛り上がっている。19も18とほとんど同様であるが、内面へラ磨きがなされている。20・21は高台が高く外に開くもので、高台内部はへソ状にくぼむ。22は黒色土器で、丸々とした埴で高台は小さい。内面はよくへラ磨きがなされている。在来の土器とは一見して異なるものである。23・24は内黒土器で、24は内面底部が突出する。25・26は10と共に重なっていたもので、25・26共に粗製のゆがんだもので、器とするにはやや不向きであろう。外面に稜を持ち、底部がふくらむ様な形となり、25は内部中央に粘土塊をつけたような凹凸がある。27～31は灰釉陶器で、27は浅く押しつけた輪花皿で内面に段をもつ。高台下部は外側を“く”の字状にしている。28も段皿。見込みに重ね痕あり。29～31は埴で、30・31は似たものと思われるが、30は高台が丸味を帯び、外面に僅かながら稜をもつ。31は高台が立っている。

(神沢 昌二部)

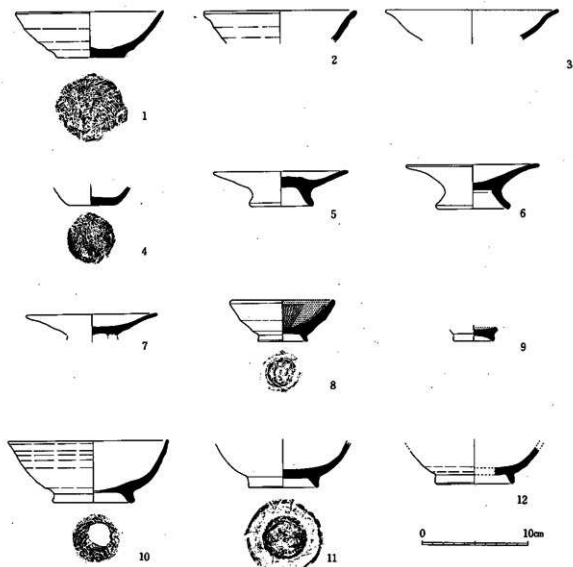
## 2 第2号住居址(第8・9図、第5・26・27図版)

遺構 本址はB地区の南側B-5グリットにあり、東西6.4×南北6.5mのはほぼ正方形のプランで、方位はN113°Eでカマドは東壁中央にある。壁高は東壁30、北壁20cmで南壁は30cm西壁は不明。床面は北側に砂利層、西側では判然としないなど問題点はあったが、カマド周辺は堅く水平であった。柱穴はわからず、址内西側には後代の集石があった。カマドは石組で僅かに煙道を確認した。カマドは壊されていたが、焚口には炭化した木材もあり、その左側には穿孔された灰釉陶器埴が上向きで発見された。またカマド内にも土師器坏が入っていた。また址内中央部より内黒埴が出土している。



第8図 第2号住居址実測図 (数字は出土遺物No.)





第9図 第2号住居址出土遺物実測図

遺物 1～4は環で、1はカマド内にあった環で、やや大き目である。第1号住居址の8と似た趣きがあり、外面の稜が4段、内面中央がくぼみ、それをふさいだのか胎土を後から補っている。2・3は共に口縁部破片である。4は一般的な小型の環で腰に稜がないもの。5～7は高台付皿で、5は内面中央がもち上がったもの。6はいかにも盛りやすい浅いくぼみをもつもので、高台は丁寧につけられている。7は高台がとれているが浅く平らな環部を示すものである。8・9は坑で8は内黒の付高台で小振りて内面にへら磨きがなされている。外面には高台付後の調整により稜がつけられ、外面中央にも弱い稜がある。器形からして既出の坑とはやや異なるものがある。9は小型の坑で内面黒色である。小破片で全体はつかめないが高台が浅く、つくりが丁寧である。10～12は灰釉

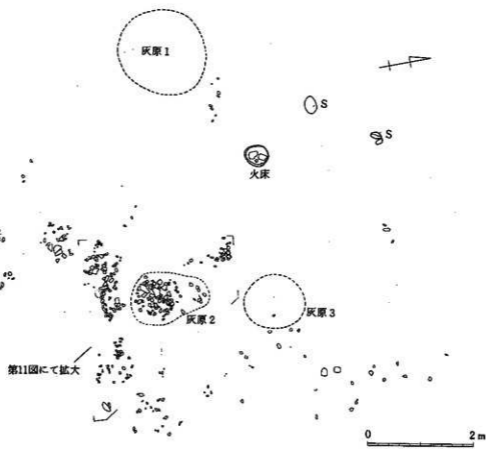
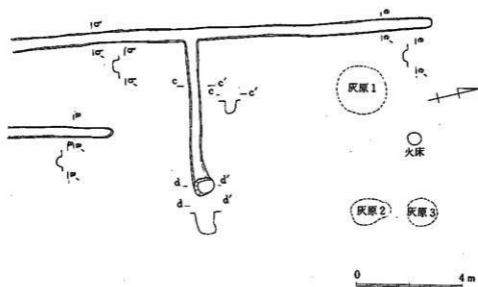
陶器塊で、10は穿孔されたものである。つくりは粗く胎土に小礫が入っているため器面がはじけたりしている。外面にはろくろ引き上げによる緩い稜があり、見込みはややくぼむ。軸はつけがけをしているが、不整部分を補修したベトが部分的につけられている。11はやや深めの塊で、壘付部はなめらかになでられている。

(神沢 昌二郎)

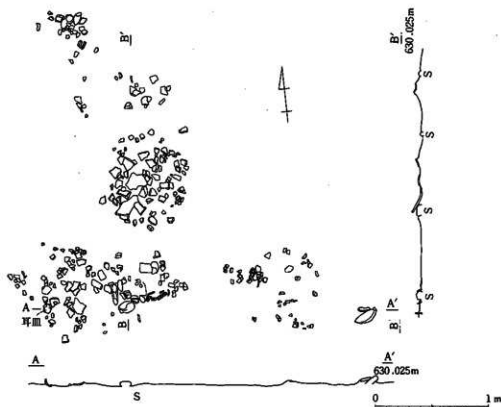
### 3 鍛冶屋場及び関連遺構 (第10~14図、第6・7・28~32図版)

遺構 神戸遺跡からは、B地区の発掘地点の北東部に鍛冶屋場とそれに附属する関連遺構が検出される。主なる遺構として、火床(ほど)、灰原、溝、貯水ビット等があげられる。先ず鍛冶屋場の中心である火床がHトレンチの2区に発見された。その規模は直径約30cmの円形で、深さ約20cm位、その内部には焼灰と共にナラ、クヌギの木炭が出土する。この火床に1本の羽口がさし込まれていたが大分長期にわたって使用されたこととみられ、原形に若干のくずれがみられる程となっていた。

この火床を中心にして周辺に灰原3箇所が検出される。灰原1はGトレンチ2~3区にわたり発見されたもので、灰原の中でも最も規模が大きく直径約2mの円形を示し、落ち込みの深さは検出面より約23cmであった。浅皿状のビットであるが内部より緑釉の破片、土師器、灰釉陶器の坏、皿類の破片が多出する。これらの破片は底部が多く、それらの殆んどが底部上を欠いていて、欠損のあり方に共通性を感じさせた。鉄滓も含まれており、木炭化物と焼土灰の堆積が内部をみたしていた。灰原その2はG・Hトレンチの各1・2区にわたるもので、規模は直径約1.5mの円形を示し、その深さは約10cm程であった。内部より土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器の各破片が多く出土する。又、Hトレンチ1区より刀子が出土する。大きさは長さ9.8cm、巾1.5cmを示し、Fトレンチ2区より釣針状の鉄製品が出土する。大きさは長さ11.5cm、巾1.8cm、爪の長さ約2cmであり、同類がGトレンチ2区と第14号墓址より各1出土している。灰原その3はHトレンチ3区に検出される。規模は東西約100cm、南北約110cm、深さは検出面より約7cmの浅いつくりであった。内部より鉄滓、土師器、灰釉陶器の坏、皿類の破片、木炭化物の粉末等出土し、焼土灰等がつまっていた。この火床、灰原を含めたG・Hトレンチの各1~3区の中心的な鍛冶屋場周辺地域には、土師器、須恵器、灰釉陶器の各日常雑器の破片がおびただしく、緑釉陶器の破片がめだち、又、内黒や内外黒色処理の耳皿を含む土師器片もみられた。耳皿は直径約9.2cm位で図上復元可能である。これらの耳皿や緑釉陶器などは鍛冶屋場に祀られた金山神の神事に使用された特殊な器ではなかったかと推測される。又、鉄滓の混在が目立った。更にかつて鍛冶屋場より掘りだされたこととみられる、いわゆるかなとこ石が3個程周辺に所在したが、表面の平坦面は黒い光沢をもって滑らかとなっていた。



第10図 かじや場遺構実測図



第11図 かじや場遺構遺物出土状況図

溝状遺構はB地区のC-Hトレンチの各3区にわたっている南北方向に走るものと、これに平行するかのようC-Eトレンチの各2区におよぶ南北方向の溝2条が検出され、更に前者の溝に直交する東西方向のFトレンチ2-3区におよぶ溝が認められる。これらの溝は、Cトレンチ3区の溝を除きいずれもその上面巾が35-40 cm位で、検出面よりの深さは5-20 cmを示していた。D-Hトレンチ各3区におよぶ南北線の溝を掘り下げた結果、溝内の底部に小砂粒の残留がみられると共に土師器、須恵器、灰釉陶器などの破片が、図上復元可能な土器と共に出土する。又、鍛冶屋場に近いH-Gトレンチの各3区の溝内からは鉄滓の捨て流されたと思われる山が溝の東寄りに連続して発見される。Fトレンチ2区の溝状遺構内より鉄製の紡錘車が検出される。溝の上部検出面より17 cm下であり、同面上には木炭粉末と土師器の坏部の破片多数及び灰釉陶器片、鉄滓等が散在する。この分布範囲は溝内で東西方向76 cm、溝の巾35 cm、その堆積は約20 cmであった。

紡錘車出土箇所の東に接して溝内に南西-北東方向の長さが65 cm、これに直角に交わる方向の長さが70 cm というやや楕円形のピットがあり、その穴の深さは溝の上面より約90 cmの深いものであった。又、このピットの上面より約60 cm下に20 cm位の空洞部分があり、その下には、大きな川のよどみなどに堆積するいわゆるはなごみが認められる。又、このピットの溝内上層覆土には土

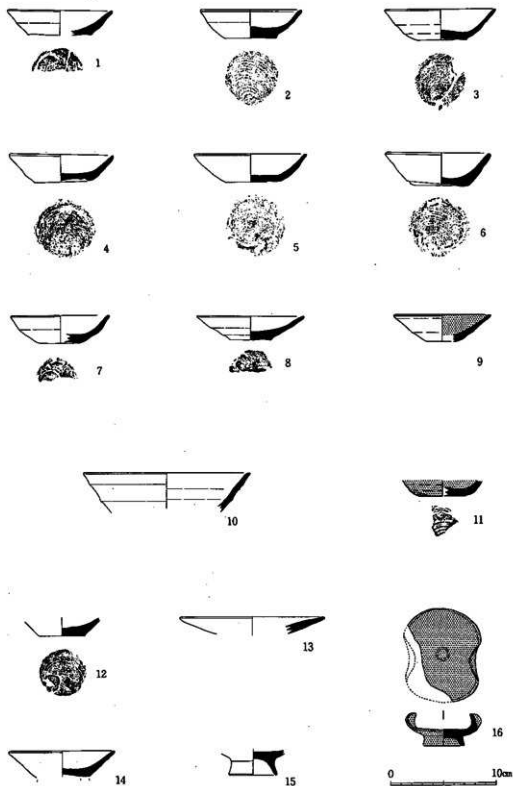
師器の坏や灰釉陶器片、木炭化物が出土する。いずれにしてもこのピットはFトレンチ2区内に、東西方向にのびる溝の東側終端に設けられていて、あきらかに貯水目的のピットであることが知られる。

Cトレンチ3区の溝はH～Dトレンチの3区に連続する溝に断続して南部に所在し、その巾は85cmと広まり、長さ230cm、深さ約20cmであった。溝内からは小礫に混じて土師器片(内黒を含む)と木炭化物が出土する。このCトレンチ3区の溝に西接平行してC～Dトレンチの3区にわたり小礫による帯状の集石を認める。その規模は南北方向に長く580cm、巾は100～140cmでその堆積は約15cmを示す。内部には土師器、須恵器の破片など微量検出されたが、溝を保護するための施設であったのかもしれない。

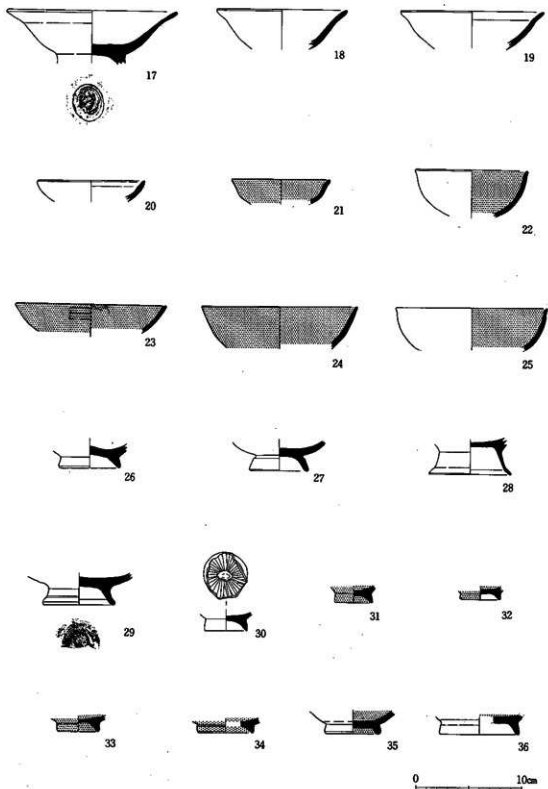
以上の様な各筋の溝や貯水目的のピットの存在は、鍛冶屋場における焼入れやさめらかしに必要な水を導入するための施設であることはここにいうまでもないことである。

(大久保 知巳)

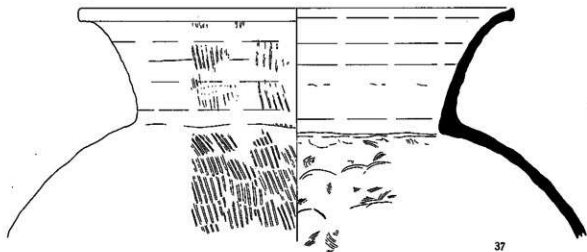
遺物 本址からの出土遺物は夥しい出土があり、それは包含層から遺構面まで続いており、二回、三回に分けて測図しながら取り上げた。したがってここに図示し得たものはその一部であり全貌を窺うことはできない。特に記しておきたいことは須恵器についてである。須恵器は図示したものがただ1点であるが、才11回の遺物出土状況図や24図版にみられるように大型破片が重なって出土している。その点数はおおよそ1000点に余りあるのではないか。しかし復元してもなかなか器形の判明するものにならず、時間的制約もあって今回は思い切って割愛した。また後日報告の機会をつくりたい。反面、土師器については極力図示するようにつとめたが、ここでは21点をとりあげた。内、坏は13点、皿2、埴6点で、須恵器に小型の坏、埴等がなかったこととあわせて、灰釉、緑釉陶器は少く図示したものは2点である。個々についてふれると、1～12は坏で総じて小型の物が多い。2は完形で底巾のはっきりとした糸切り底で外面中央に稜がある。内部中央は径2cmあまりで盛り上がっている。底は厚い。3も2同様内部中央が上がる。外に稜が3段につき、つくりは粗い。4は完形であるがゆがんでいる。底部も平らでなく、胎土に小枝が何かが入っていたか小穴が6ヶ所にわたってあいている。5は浅めの坏、6も完形だが一部口縁にゆがみのあるもので底部は荒れている。7は底径のはっきりしないもので、全体に丸味を保っている。8は坏に分類したが浅く皿に近い。内部にわずか稜を持っている。9も浅いが内黒である。10はやや大き目の坏、11は黒色土師の腰に丸味をもつもの、12は糸切り後平らに調整されている底をもつもの。13～15は皿で、14は高台を欠いている。15は高台も小振りで残存皿部が平らである。16は黒色土師の耳皿で、中央に小さな環状のくぼみができている。皿部は裏裏ともよく磨かれて艶がある。17は大型埴で浅く広がる。



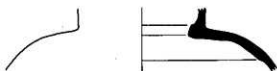
第12図 かじや場遺構出土遺物実測図 (1)



第13図 かしや場遺構出土遺物実測図 (2)



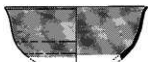
37



38



39



40



41



42



43



44

0 10cm

第14図 かじや場遺構出土遺物実測図 (3)



内部には巴状のもり上がりがある。20は小型の坏で内面の口縁下に稜をもつ。21-25は黒色土器又は内黒の埴である。21・23はよく磨かれている。26・28は高台付皿で、28は高く薄手の外反する高台をもつ。27・29は埴としたが、高台部分のみなのでやや不明なところもある。29は内面渦巻状の調整痕を残している。30-34は小型埴で30を除いて黒色土器である。30は内面へラ磨きをされたもので、高台は一部赤褐色に黒化したところもある。二次焼成をうけたものかと思われる。34までのうち33をもってみると、丁寧なつくりで、高台外面もへラで磨いている。35・36は内黒で35はよくへラ磨きされている。37は大型甕の口縁部から肩部にかけての部分で、口縁はつよく外反し、頸部肩部にタタキ目が残るが、頸部は調整によって消えかかっている。内面はかなり凹凸があり線の細い同心円文がうすく残っている。接合部は肩部の境で、内側にもり上がっている。他の須恵器については図示を省いたが、更に肉厚の厚いものが多く、中には剝離しているものもあり、かなり粗製、あるいは技術が悪いことを窺わせるものがある。以下38-43までは40・42・43が緑釉陶器、他は灰釉陶器である。38は広口瓶の頸から肩にかけての部分で、外面には灰緑色の釉がかかり、頸部との接合部分で離れている部分もある。胎土もよくしっかりしている。39・41は段皿で特に39の高台は低い。40は深緑色の深めの埴である。胎土はやわらかく軽い。42・43は40にくらべ松本周辺でもよく見かける賈味を帯びた緑で、42は胎土がやわらかく、釉に吹き出しがあってブツブツと小孔をあけている。対して43は胎土が灰色で硬く重量感がある。高台はやや反り気味である。44は羽口で炉に接する部分で強く焼けており、鉄滓もついている。推定口径9.1 cm、内部の穴は2.4 cmで縦にスジが入っている。

(神沢 昌二郎)

#### 4 墓 址 (第15-24図、第1表、第8-14・33-39図版)

遺構 神戸遺跡からは、墓址関係の遺構が都合21箇所に検出される。A地区に3、B地区に17、C地区に1の分布を示し、B地区がその中心となる。これらの墓址はその様相が多様性を示し、大別して次の5分類が可能である。(1)火葬墓で人頭大の集石及至はこぶし大の礫を集めたもの。第4-7号墓址。(2)火葬墓で集石を伴わないもの。第9・19号墓址。(3)砂利及至はこぶし大の礫を長楕円状に敷いた土葬墓と考えられるもの。第1・10-15号墓址。(4)円形状の集石をもちながら焼土灰を伴わないもの。第2・3・8・16-18・21号墓址。(5)大甕を用いた火葬墓と思われるもの。第20号墓址等々があげられる。これらの設営年代は、副葬品や周辺の出土遺物等から平安時代後期におけるものと考えられるが、それぞれの前後関係にはあまり年代差を感じさせないものと推測される。墓址には一連番号を付し整理したが、以下各遺構に従い、その主なる様相について記述する。

##### 第1号墓址

第1号墓址は、A地区のCトレンチ3区内の東側に発見された集石墓である。集石の分布範囲は南北方向に長軸をとり、約260 cm、短軸は東西方向で約100 cmを記録する。総じてこぶし大の礫が

主体をしめるが、18×15 cm 程度の石も約10個程、南部と北部に混在する。焼土灰は認められず、副葬品その他の遺物出土はなかった。

#### 第2号墓址

第2号墓址は、A地区のCトレンチ3区の中央部分に発見された集石墓である。トライ状の落ち込みを示し、南北130 cm、東西100 cmの楕円形を呈し、竪穴の深さは検出面より約17 cmを示す。壁は北側がほぼ垂直に降り、南側が緩い傾斜で床面に達するが、床面はほぼ平坦であった。その床面上にこぶし大の礫を主とする集石が周壁添いに残されていた。ピット内には副葬品・焼灰等確認できなかった。

#### 第3号墓址

本址はA地区のCトレンチ6区に発見された集石墓である。落ち込みをもたず、約80 cmの円形状に集石が残るが、集石はこぶし大の礫を中心として、人頭大程度の石2個程が、その中央部分に置かれていた。副葬品・焼灰等を見とめなかった。

#### 第4号墓址

B地区のAトレンチ7区に発見される。検出面に約1 m円形状の焼土灰の分布を認めた。本址の断面たち割調査の結果、深さ約23 cmの浅皿状の落ち込みがあり、その内部に南北方向90 cm、東西方向50 cmの範囲に、焼灰に包まれた人頭大からやや重量感のある石数個が集められており、木炭粉末と小砂利がその底部に僅かながら敷かれていた。底部近くに土師器の細片が1個出土する。

#### 第5号墓址

本址はB地区Bトレンチの5区に発見される。ほぼ80 cm円形状に焼土と木炭粉末の分布するを認め、その内部に人頭大の自然石3個、こぶし大の礫数個が集められていた。又、ほぼ完形の土師器の坏が、北側に横倒しの状態で発見され、その他、土師器、須恵器、灰釉陶器などの破片が混在して検出される。

#### 第6号墓址

B地区のBトレンチ7区に発見される。検出面での規模は、南北方向約100 cm、東西方向約80 cmのやや楕円状を呈する焼土灰分布を認め、その堆積は約30 cmを記録する。内部には人頭大前後の自然石23個の集石が含まれるが、その焼灰内には火焼骨が点在出土する。又、灰釉陶器の碗とみられる細片が2個出土する。副葬品として、南部の焼土内に約40 cmはなれて、文字の判読できなくなった古銭2枚が検出され、北部の焼土内には刀子が1本検出される。この刀子は長さ22 cm、巾2 cm、厚さ0.2 cmを記録する。この刀子は精査の結果、刀身部に螺鈿の附着がみられたが、おそらく鞘の部分に螺鈿細工が施されていたものと理解される。又、柄の部分にベッコウの変質したと推定されるものも一部に存在する。刀身は幾重にも鍛造のよくなされた、質のよいものであることがわかった。副葬時は外装の美しい立派な刀子であったことが推察され、平安末期に魔除けとして、この様な刀子を副葬させた被葬者が偲ばれる。本址の断面たち割り調査の結果、第4号墓址と同様浅皿状

の凹みがあり、その底部には木炭粉末と小砂利が僅かながら敷かれていた。

#### 第7号墓址

B地区のFトレンチ5区に発見される。検出面ではほぼ50 cm 円形状に、焼土灰と木炭化物の分布を認める。15 cm 前後の浅い落ち込みがあり、内部にこぶし大の礫4個が含まれていた。副葬品他の遺物出土は認めなかった。

#### 第8号墓址

B地区のDトレンチ2区に発見される。第1号住居址の西南部を外れた隣接地の、上層部に発見された遺構で、ほぼ70 cm 円形状に集石が認められる。こぶし大の礫を主体に、人頭大の石3個程が集められていた。副葬品等遺物の検出はなかった。

#### 第9号墓址

B地区のGトレンチ5区に発見される。集石を伴わず、約50 cm 円形状の焼土灰の中に火焼骨が発見される。副葬品と考えられる鉄滓が墓址内に含まれていた。周辺の出土遺物の状況から、やはり平安後期の所属であろうと理解される。

#### 第10号墓址

B地区Bトレンチ7区内の第6号墓址の西に僅か50 cm 程はなれて、第10号墓址が発見される。こぶし大の礫を集めた長楕円状の墓址で、規模は長軸をほぼ東西方向にとり230 cm を記録、短軸はこれに直角に交わる方向で、約60~100 cm を数える。集石礫の厚さは約20 cm であった。第10~15号墓址は、土葬による伸展葬の墓址かと思われる。

#### 第11号墓址

B地区Bトレンチ7区の第6号墓址の東に隣接して発見される。砂利を敷いた墓址で、規模は東西方向の長軸が170 cm、南北方向の短軸が50~63 cm で、やや長楕円状であった。本址の断面たち割り調査の結果では、茶褐色土上に約23 cm の厚さに礫を盛っていることがわかり、北側は礫のやや大きなものを押し立てて、その輪郭線をめぐらしていた。副葬品その他の遺物検出はなかった。

#### 第12号墓址

B地区Cトレンチの5~6区にまたがり発見される。砂利・こぶし大の礫・人頭大の石が混合されており、規模は南北方向に長軸をとり約300 cm、東西巾は約110 cm で、その堆積は約20 cm であった。副葬品その他の遺物検出はなかった。

#### 第13号墓址

B地区のC・Dトレンチの各6区にわたり発見された墓址で、砂利、礫混合となる。南北方向に長軸をとり210 cm、短軸は90 cm で長楕円状を呈し、その堆積は約23 cm であった。遺構内より須恵器、灰釉陶器の各破片が出土する。

#### 第14号墓址

B地区のDトレンチ6~7区にわたり発見される。砂利・こぶし大礫混合の集石墓で、東西方向

に長軸をとり240 cm、短軸は50～140 cmであった。西側が東側より14 cm 高いつくりであり、遺構内より鉄製品2個と須恵器片などが出土する。

#### 第15号墓址

B地区のDトレンチ6区で発見される。砂利とこぶし大の礫混合で、東西方向に長軸をとり210 cm、これに直交する短軸は約80 cmであった。堆積は約38 cmを示す。遺物の出土はなかった。

#### 第16号墓址

B地区Dトレンチ3区内の、溝状遺構内より発見された墓址である。約50 cm 円形状に砂利の分布を認め、遺構内より土師器の坏の破片を多出する。底部は特別に掘り凹めていないが、やや東南に傾斜するつくりであった。

#### 第17号墓址

B地区Fトレンチ3区の、溝状遺構内の下部面に発見される。南北約64 cm、東西約45 cmの落ち込みの輪郭線が認められ、掘り下げの結果、溝の検出面より36 cm 下層に集石の墓址が検出される。集石の規模は南北に60 cm、東西40 cm とやや楕円で、石はこぶし大の礫5個と他は砂利が用いられていた。この集石の北側に、土師器のほぼ完形に近い坏3個が伏せられた状態でおかれ、集石のほぼ中央部に鉄器と思われるものが置かれていた。

以上第16・17号墓址の北側におかれた土師器の坏は、精霊封じのために使われたものとみられ、又、鉄器らしいものは、魔除けを表わしたものであろう。

#### 第18号墓址

B地区Fトレンチ3区の溝状遺構内の下部面で発見され、第17号墓址の北側2 m あまりにある。南北50 cm、東西50 cm あまりのほぼ円形のこぶし大礫と砂利で、5 cm ほど溝底よりもち上っており、遺物はなく、底部も掘り凹めた様子もなかった。

#### 第19号墓址

本址はB地区Hトレンチの3～4区の境に検出された火葬墓であるが、第9号墓址同様集石を伴わなかった。焼土灰の分布はほぼ50 cmの円形であり、その堆積は約20 cm を記録し、焼土灰内に火焼骨が検出される。又、副葬品とみられる鉄滓が内部より検出される。第9号墓址と同様相を同じくするが、鉄滓の副葬は銀冶職人の魂の再生を願っての儀礼と理解したい。

#### 第20号墓址

B地区C・Dトレンチ5・6区にまたがって検出されたもので、長径は南北に150 cm、短径は東西に最大100 cmの長楕円形で、南側には径50 cmの須恵器の大甕が立位であり、北側はやや掘り凹めた程度の皿状ともいえる凹みをもつものである。

本址は表土除土後5 cm 位より土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄滓など夥しく出土し、炭化物、焼土もあったことからして、火葬墓と言えよう。これに伴う遺物であるが、須恵器の大甕を使用し、灰釉陶器、緑釉陶器等図示したものだけでも11点もあり、他の墓址とは全く趣を異に

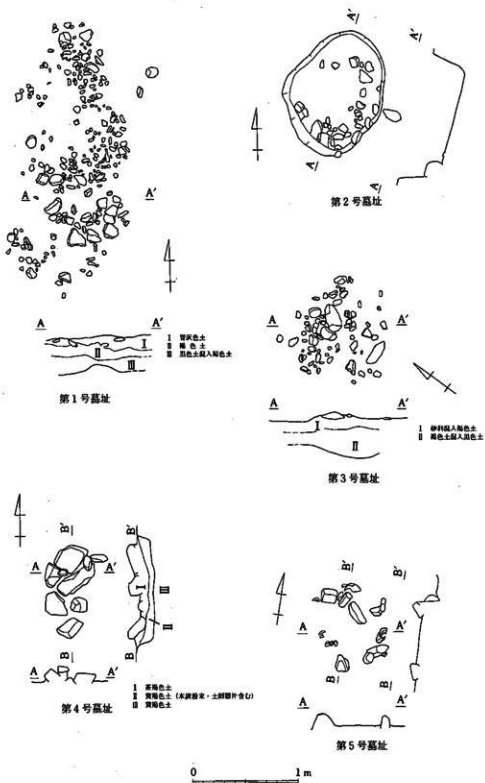
しているものである。

#### 第21号基址

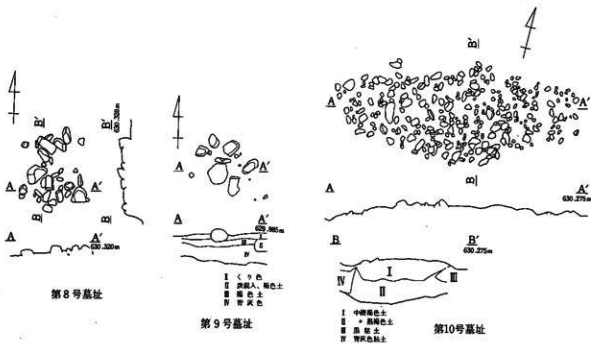
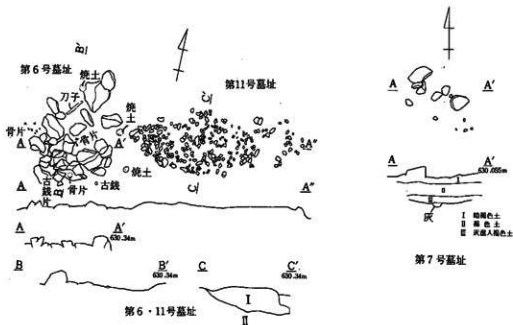
C地区のFトレンチ1区に検出される。集石の規模はほぼ85cmの円形状を呈しており、その堆積は約20cmを記す。礫は5×10×5cm程度の石を主として用い、その輪郭線が比較的整い、石の上面も平らに近く、高低差をあまり感じさせなかった。副葬品が鉄器1点伴出した。

(大久保 知巳)

遺物 基址に伴う遺物は少く、第16・20号が主となるが、それらのうち図示したもの20点についてふれる。1は第5号基址出土で底部は平らに調整されており、外部に2段の稜をもつもので、胎土はやや砂っぽい。2・3は第9号基址の灰釉陶器で、2は股皿、3は碗口縁部である。4～6は第6号基址出土の刀子と銅銭で、4は遺構の部でふれているので重複をさけるが、現長20cmあまりである。銅銭は熙寧元宝ともう一枚は半欠のため元宝としか読めない。7～18は第16号基址出土のもので、7～12は坏で、7・8は浅目のもの、9は底部が小さく腰の張ったもの。10・12は底の糸切りの状況と、丸味を帯びた腰部、内面の渦巻状の調整痕など、全く同一である上に、共に内外に薄い黒色炭化物が付着している。11は大型の坏で赤褐色をしているが須恵器ではないかとも考えられるもので、これも大小の差こそあれ、10・12とよく似ている。13・14は高台付皿で、14は足高高台である。高台はぐっとふんばって外反している。15は緑釉塊で胎土が灰白色のものである。釉は浅緑色である。16は広口瓶の口縁から頸部で、ろくろ引き上げによる浅い段があり、口唇はつよく立っていく。内面に黄緑色の釉がかかる。17は小型の土師器塊で高台の付け方が粗雑である。内面には10～12同様の黒色のものが付着している。18は基址からやや東寄り出土した鉄製の紡錘車で全長25.5cm巾0.8cm円板は径5.5cmである。19・20は第17号基址出土の緑釉陶器塊で、20はかじや楊42の緑釉塊と同じく釉に小孔のあるもので、色、胎土とも黄緑色である。21は第18号基址出土の灰釉陶器皿で腰がつよく内弯しているが、口唇には三角状の刻み目を有するものである。22～39は第20号基址出土のものである。表2にあるごとく本址は灰釉陶器がほとんどで、土師器は図示できたものは3点のみである。22～24は土師器で、24はゆがみのつよい坏で完形である。腰と口縁下部に稜をもつ。胎土は砂っぽい。23は高台付皿で高台がとれて無い。皿部は直線的に開いている。

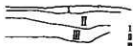
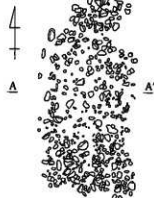
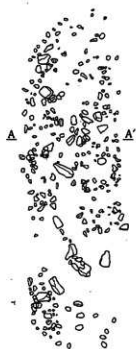


第15图 第1~5号墓址实测图



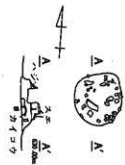
0 1m

第16图 第6~11号墓址实测图



- I 薄层人骨灰土
- II 1.2m厚大の骨灰土
- III 黄土人骨土

第13号基址



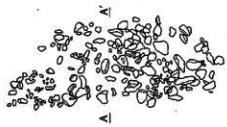
- I 粘黄褐色土
- II 小砂粒
- III 厚2.0-4.0黄色土

第16号基址



- I 褐色(黄)土
- II 黄土人骨土
- III 粘褐色土
- IV 薄层人骨灰土

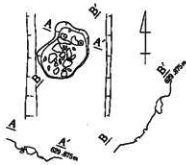
第12号基址



第15号基址



- I 小砂、黄土人骨土
- II 中砂黄土人骨土(砂)
- III 黄土人骨土
- IV 黄土人骨土

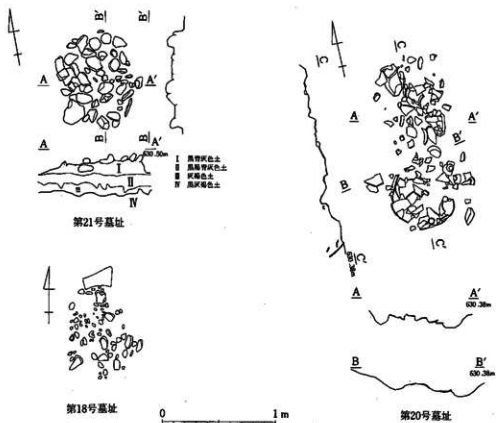


第17号基址



第17图 第12·13·15~17号基址实测图

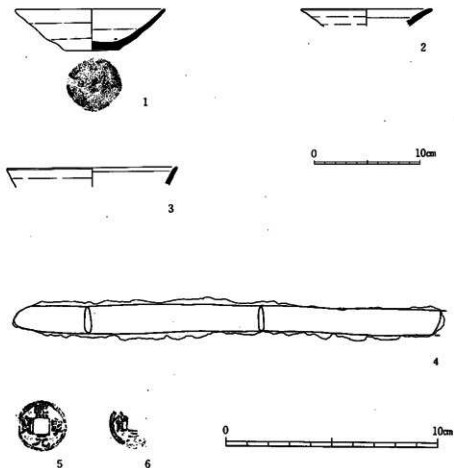




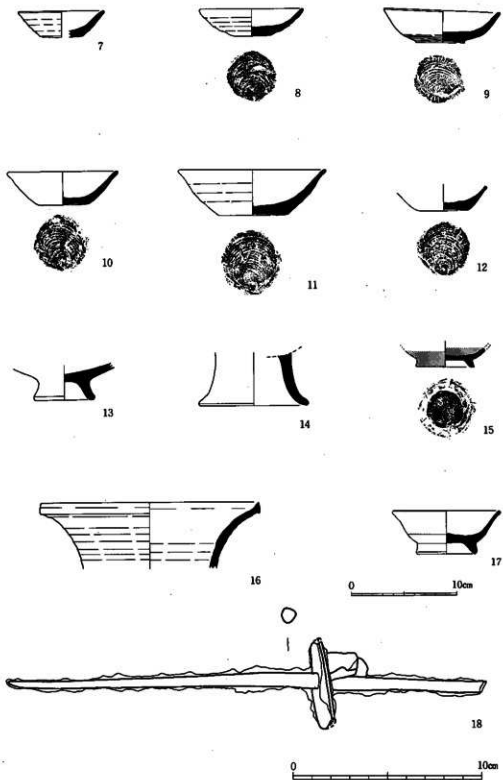
第18図 第18・20・21基址実測図

24は外面に稜のつよい内黒帯である。25~28・34は灰釉段皿で、25・26は輪花皿である。25の輪花は押しつけただけの目立たないもの、26は5ヶ所につよつまみ状に押し上げたもので、見込みには重ね焼の跡があり、中央は凹んでいる。底はいずれも糸切り跡を残す付高台である。27は焼成がよわく、柔らかな感じで高台は小さい。軸はつけ掛けをしている。28の段皿はしっかりしており、高台の畳付を細くしている。27・28いずれも高台内はヘラ調整している。34は高台内に糸切り痕を残している。29~32は埴で31を除いて他は大型であり、32を除いて輪花埴である。29の輪花は口唇を外側から押えつけ、外側面をヘラ状工具で削り、その後内面を縦に押え引きしているらしい。高台内は30を除いていずれもヘラ調整している。33は37・38等の広口瓶の底部で、底部内面にまで灰釉がついている。35は緑釉陶器皿で口縁が大きく屈曲するもので、胎土は灰白色で比較的軽い。軸は二次焼成のため内面に僅か原色をとどめているが黄緑色である。36は特大の埴で、高台に1点の穿孔がある。この様な大きな埴の類例を知らない。口縁部は直に立つ。37は肩の丸い広口瓶で、肩辺に削り後の僅かな稜がある。厚手で軸は薄く茶灰色を呈す。38はいくつにも割れた同一器体を図上復元したもので、37に比べてやや肩が張るものである。器厚は底部上が薄く、頸部が1.3 cm と非

常に厚い。接続部分は底部、肩部、頸部らしく、外面にはやや緑味を帯びた茶灰色の釉がかかっている。39は第20号基址のいわゆる甕棺にあたる用途に供せられたもので、最大径50 cmの須恵器大甕である。全面に格子叩き目を施し、内面は同心円文で、外面は一部スリケシ、内面はほとんどスリケシしている。大甕にしては器壁が薄く7 mmあまりである。この大甕につくものか、同様格子目の口縁部があるが、口唇から肩まで15 cmで、頸部には叩き目文はない。第24図39の大甕と類似している。



第19図 第5・6・9号基址出土遺物実測図



第20图 第16号墓址出土遗物实测图



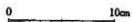
19



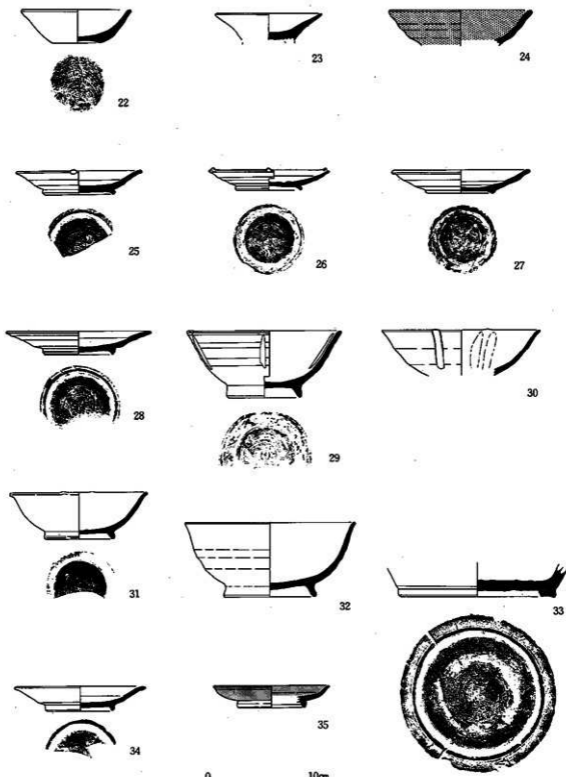
20



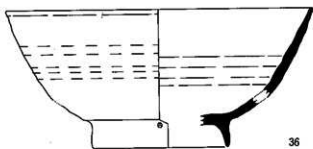
21



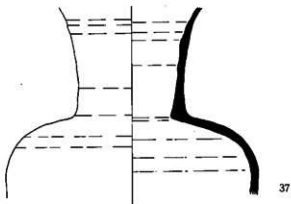
第21图 第17・18号墓址出土遺物実測図



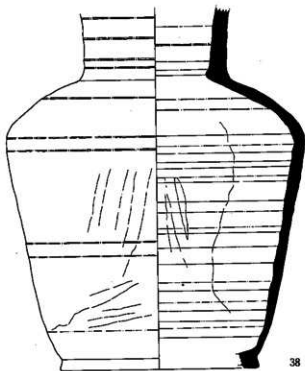
第22图 第20号墓址出土物实测图 (1)



36



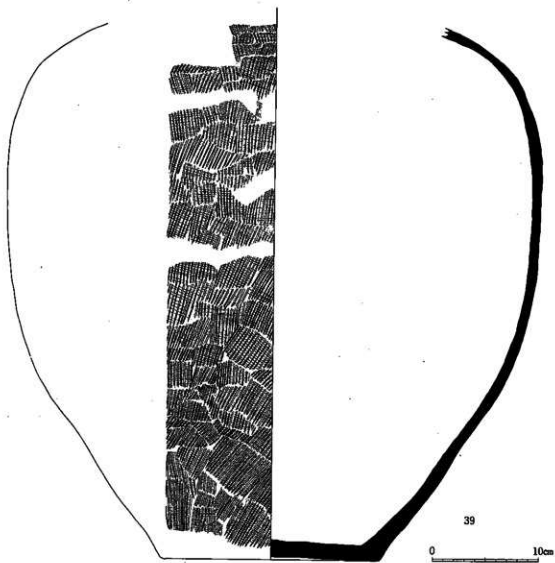
37



38

0 10cm

第23图 第20号墓址出土遗物实测图 (2)



第24图 第20号墓址出土遗物实测图 (3)

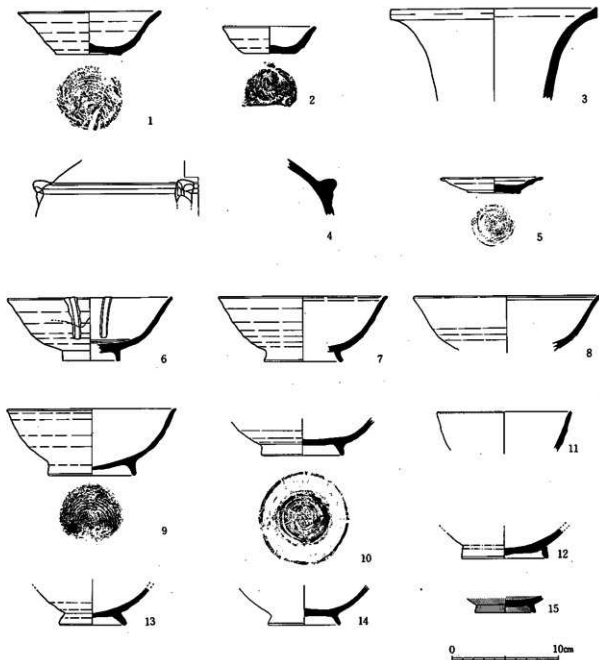
## 5 遺構外 (第25-31図、第40-50図版)

遺物 遺構としてとらえられなかったものの、包含層から多量の遺物の出土があった。ここでは土器についての108点を図示したが主要と思われるもののみにもふれる。また地区は全てB地区である。出土地点は一覧表にあるので略させていただきます。1は土師器坏。深めでやや楕円形にゆがみ、外面に3段の稜がある。内面中央には突起がある。3は広口瓶で内外面に灰釉が付き、口唇には釉だまりで淡緑色を呈する。4は須恵器の四耳壺の耳の部分である。外面釉が荒れているが平行叩き目があるらしい。5は灰釉段皿。6-13は灰釉陶器塊である。9は高台畳付にいろいろなキズ跡がついていて、一ヶ所は明らかに1mm巾3本が束になった当て跡がある。10では内面底に小木片がついていた状態にくぼんでいる。これらのことは、かなり粗雑に陶器がつくられていたことを窺わせるものである。14は土師器塊で放射状のスリケンがある。16-22は土師器で、17・19は厚みのある坏、22は暗文のある内黒塊。23は須恵器四耳壺片、24は灰釉広口瓶頸部、25は同肩部、26は同底部である。27は灰釉耳皿片、28は灰釉輪花皿、29は緑釉水注の把手基部である。30は波状口縁に刻みのある土器で縄文後期の土器である。口縁以下は無文である。31は灰釉陶器の高台部分で高台は2cmと高い。32-34は土師器で、34は足高高台で高台は上から4段に重ねてつくられている。35-45は灰釉陶器で、35は短頸壺の口縁部、36は三耳壺、42・43は段皿で、42は浅く、高台の畳付は削られて1mm程の巾しかない。43は灰釉がよくかかり、重ね焼きの跡がはっきりと残っている。42の高台内はへら調整がなされている。46は緑釉陶器の塊で、胎土は灰色のやや重みのあるもので釉は高台までついており濃い緑色である。47-59は土師器、47は甲州型の土師器壺で、口縁部で大きく外反している。胎土はやや砂っぽい。49は羽釜で、鏝の部分である。48・50-54は坏で、50は完形である。底部は糸切りで小さく、外面中程でふくらみを持つ。55・56は皿で、55は完形である。皿部はほとんど平らで、外面中程に僅かに稜を持つ。60-72は灰釉陶器で、63は完形の段皿である。釉は中央部を除く外側にあり、外面には全く釉がない。皿中央には6cmあまりの亀裂が入り、高台は糸切り後、貼りつけて調整している。73-86は土師器で、79までが坏、80・81・86は皿、82・84-86が塊である。73は平らに糸切りされた底で、外面はゆるやかに弯曲して稜を持たず、内面は輪状に僅かな凹凸がある。79はそれより小型であるが、やや73に似ており、外面に小さな稜を持っている。80・81とも高台付皿で、高台のつけ方は80が粗く、81は丁寧である。84は黒色土器の塊で内外ともによくへら磨きがされており、内面底部は径1.5cmあまりで僅かにくぼんでいる。88は灰釉輪花塊で、高台内には糸切り跡が残る。内面には中央の重ね焼きの跡以外は灰釉がついている。93-96は土師器で、93は赤黄色であるが須恵器かとも思われる堅い重味のある坏で、内面は渦巻状の調整痕が残る。95は小振りながら深さのある坏で、外面の稜がはっきりしている。98・99・107はいずれも広口瓶と思われるものの底部である。器形は似ているが、高台がそれぞれ異なる。103は緑釉塊で高台は三角状に細くなる。釉は緑にやや黄味を帯びていて美しい。胎土は灰白色で、やや重味のあるも



のである。104も緑釉坑の口縁部である。薄手で内面は斑点だらけである。釉色は103と同様であり、胎土は茶白色で軽い。108は灰釉坑で、内面口唇下に沈線がある。内面には灰緑の釉がべっとりとかかっている。

これら遺構外の遺物としては土師器杯が半数近くあり、灰釉陶器も皿・坑で半数近くを占め、灰釉陶器の多いことを示している。



第25図 遺構外出土遺物実測図 (1) (A-5・6G、B-2～5G)



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



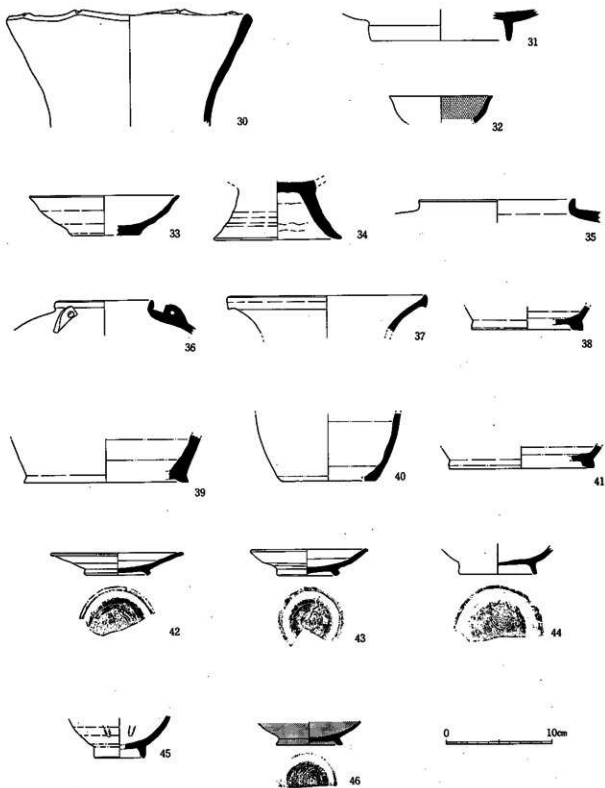
28



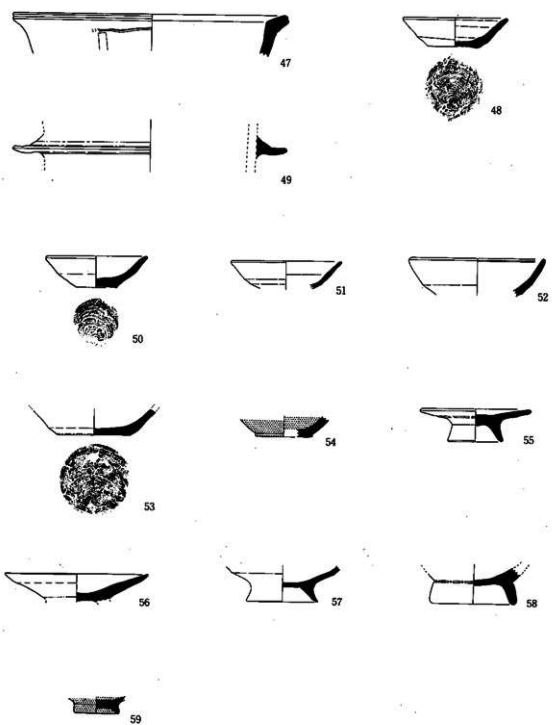
29

0 10cm

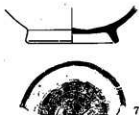
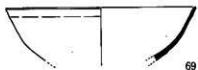
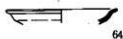
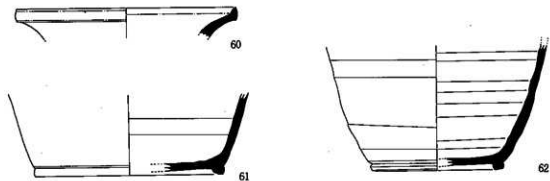
第26图 遺構外出土遺物実測图 (2) (C-3~7G)



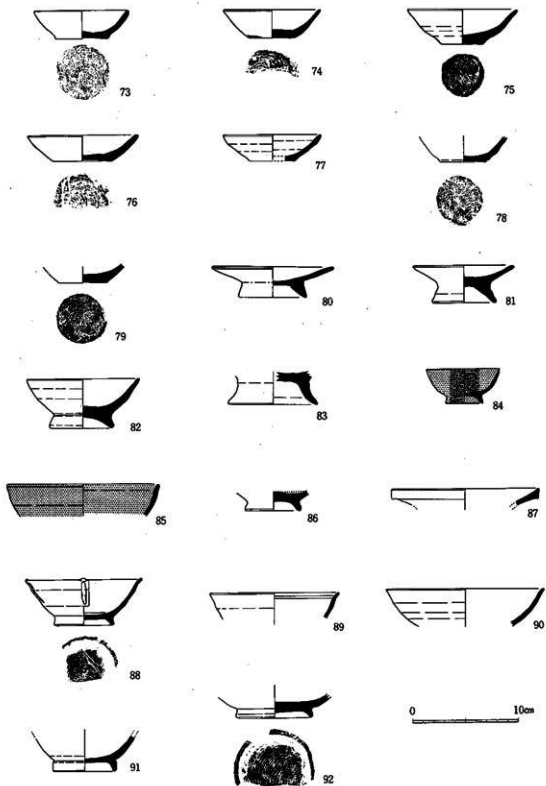
第27图 遗物出土物实测图 (3) (D-1·2·4·5·6C, E-2·3·5C)



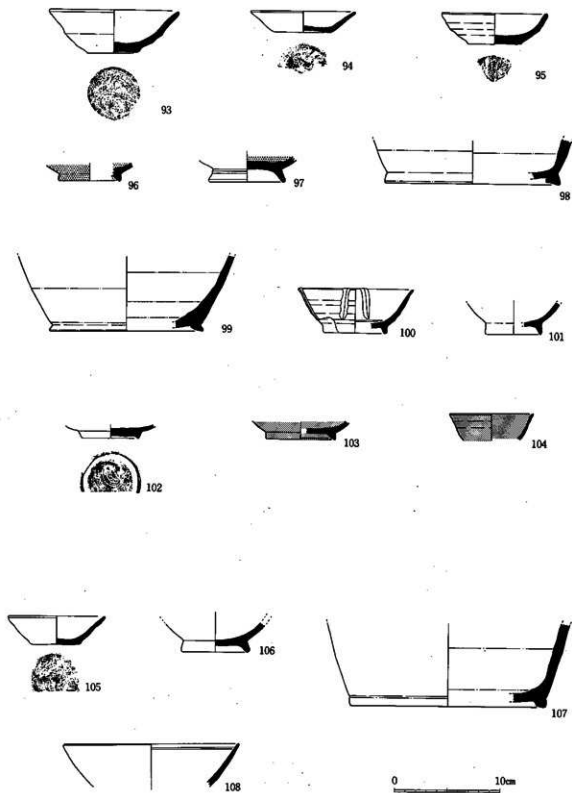
第28図 遺構外出土遺物実測図 (4) (F-2・3G)



第29図 遺構外出土遺物実測図 (5) (E-2・3C、F-2・3C)



第30图 遗物出土文物实测图 (6) (G-5 G)



第31圖 遺構外出土遺物実測図 (7) (G-3・4・6・7C、H-1・3C、表探)

## 6 陶磁器 (第32・33図、第3表)

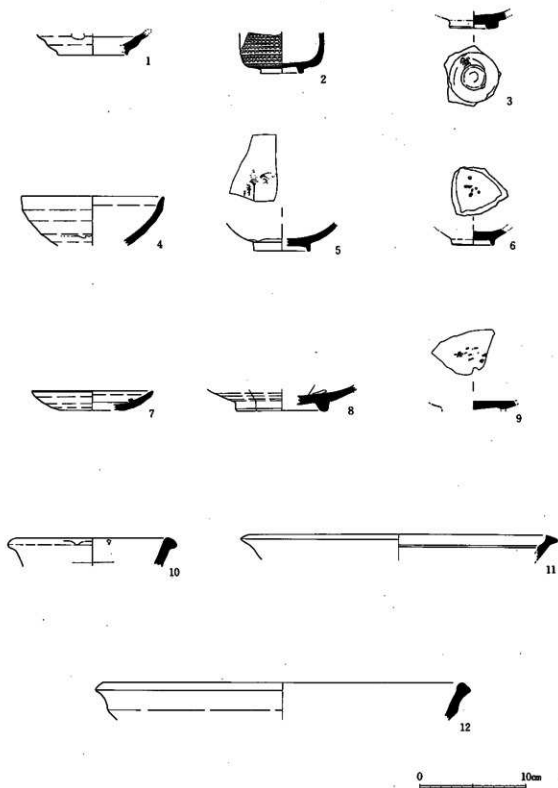
陶磁器は出土点数全てをとりあげたが26点である。この内主なものをとりあげてみる。3・4は天目茶碗である。3は内面釉は厚くガラス質になっている。高台疊付に刻印がある。4は口縁から腹にかけての破片で、口縁外部で強い稜を持ち、内外とも、茶色と黒褐色のまだら文様がある。胎土は灰白色の軽いものである。6・9・23・25は見込みに梅鉢の染付のある陶器で、23は外面菊花文の茶碗であるが、他はおふけ釉である。7は灯明皿で外面に削りの跡の強い稜が残っている。8は皿で、鉄釉と灰釉で二分したものである。10は甕と思われるが、口縁に鮮かな白と青の釉がかかっている。11・12は摺鉢、13・15~20・24は磁器で、19は伊万里系磁器の茶碗である。18世紀とみられる。他の磁器はほとんど新しいものである。14は灰釉のかかった小瓶の口縁部で、釉が厚く薄緑色を呈している。26は第5号基址出土の陶器の火舎で三角状の脚がついている。底は内面に重ね焼きの跡、外面にろくろ整形痕が残る。

## 7 鉄器・石器 (第34・35図、第4表)

鉄器はかなりの数量出土したが、図化できたものは15点である。種別としては、刀子、釘類、環状鉄製品等がみられる。1は環状の鉄製品で径3.6 cm、断面形は長径0.9 cm、短径0.5 cmの楕円形を呈している。どの様な用いられ方をしたのか推測できない。2・3・8・9は刀子である。いずれも欠損品で、全長は知り得ない。2は火葬墓に納められたもので基部に火葬骨とおぼしきものが錆に取り込まれて附着している。10も刀子と考えたい。4~7・11・13は、断面形が方形基調の和釘である。4~6はほぼ完存しているが、錆が著しい。12・14・15は用途不明の鉄製品である。錆が著しく、欠損状態も定かではない。

石器は少量出土している。全点を図示したが、種別として石鏃、スクレーパー、打製石斧、磨製石斧、横刃型石器、すり石があり、すべて縄文時代のものであろう。1~4は石鏃で、材質はすべて黒曜石を用いている。中でも4は、有茎で側刃が弯曲する特徴的なものである。5は黒曜石製のスクレーパーで雑な両面調整がみられる。6~14は打製石斧である。石材は砂岩と粘板岩が用いられている。15は砂岩製の磨製石斧と思われるもので、表面は研磨され、裏面はかなり荒い状態を呈すが刃部付近に研磨痕がみられる、めずらしいものである。一応磨製石斧として把握したが、疑問も残る。16・17は横刃型石器である。いずれも両側刃部を加工されている。18は径10.6 cm、最大厚5.4 cmを測るすり石で、片面に使用痕がある。





第32图 陶磁器实测图 (1)



13



14



15



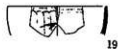
16



17



18



19



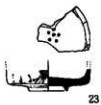
20



21



22



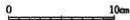
23



24

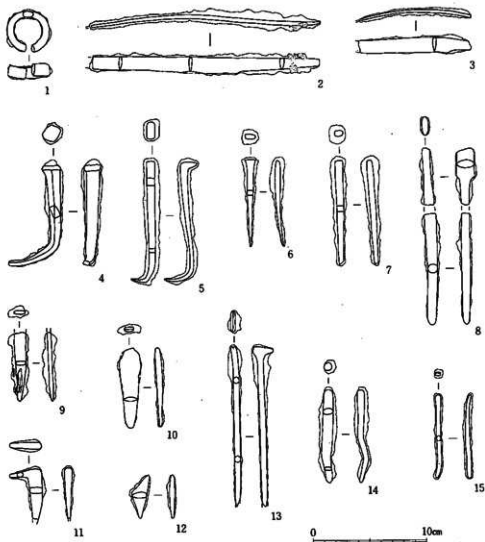


25

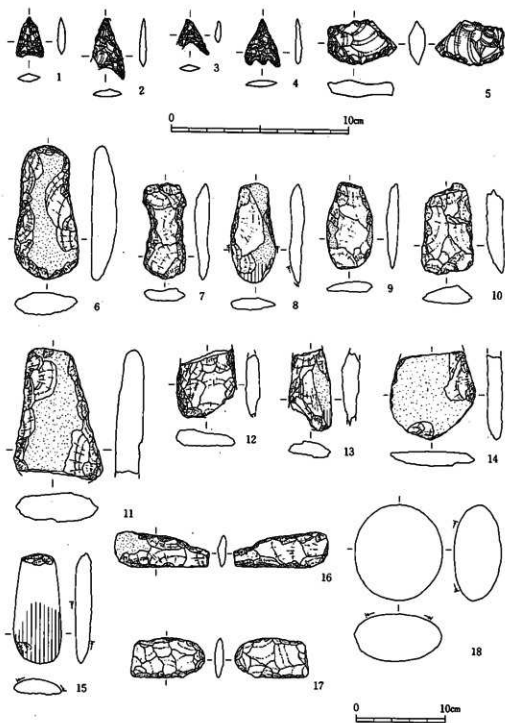


26

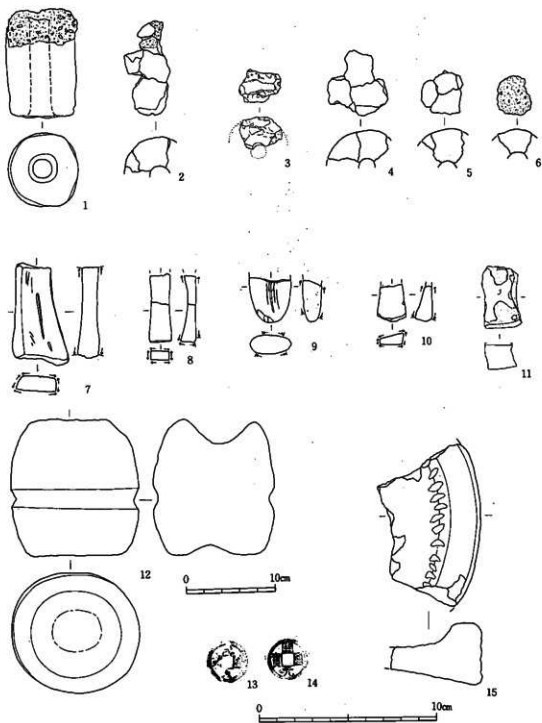
第33图 陶磁器実測图 (2)



第34图 铁製品実測图



第35图 石器实测图



第36図 その他の遺物実測図

## 8 その他の遺物 (第36図)

藕の羽口、砥石、古銭等をまとめた。羽口は1～6まで、6点の破片が出土しており、本遺跡の特長と言える。7～11は砥石で、7・8・10・11は平安時代の遺物群に伴うものであろう。9は、類例の知り得ないものである。端部に敲打痕があり、片面には縦に巾2 mm、深さ0.5～1 mmの溝の他擦痕状の細い溝がある。12は糸巻き状とでも言う石造物で、一見宝篋印塔の頂部かとも見えるが両端が凹んでいるため、その用に適さない。ここでは不明石造物としておく。13・14は宋銭で元豊通宝と開元通宝である。15は石臼の上の部分で目は完全に磨り減っていない。表面のくぼみは石臼の製作時のハツリのあとである。(神沢 昌二郎)

## 9 人骨

人骨の出土地点は第6・18号墓址からで、出土人骨については残存の程度がやや量的に多い以下の2個体について記述する。

骨は一律に不規則に破砕された形状で、微細な骨片となって残っている。それぞれ骨表面から内腔までの緻密質部分は白色を呈し、一部が褐色または灰色に変化する。これらはその骨の位置により火熱の温度差から生じた相違であり、また、すべての骨片に細かな亀裂が生じ、その箇所から断裂された形のものも多く、形態は大きく彎曲・変形し、骨質の硬化を伴うなど、火葬骨としての特徴を具えている。

(1) すべてが微細な骨片である。総じて、薄い緻密質部分は大きく変形し、ほとんどその形状を止めない。多くは小型の管状長骨片で、特に上・下肢、特に手・足骨部分のものが残存しているように推察される。

(2) 頭蓋骨の破片が10数片、いずれも2×2 cm程度の小片で、脳頭蓋の部分のみみられる板状骨である。骨厚の薄いものが多く、離開した頭頂側頭縫合や、人字縫合の一部で、癒合、未癒合の部分認められる。

その他は管状の長骨片がほとんどである。もっとも大きなもので粗線を残す大腿骨骨体、上腕骨骨体部分が各5 cm程度の長さで残る。同じく尺骨・桡骨・腓骨の各骨体部分が、かろうじて識別できる程度に残存している。(西沢 寿晃)

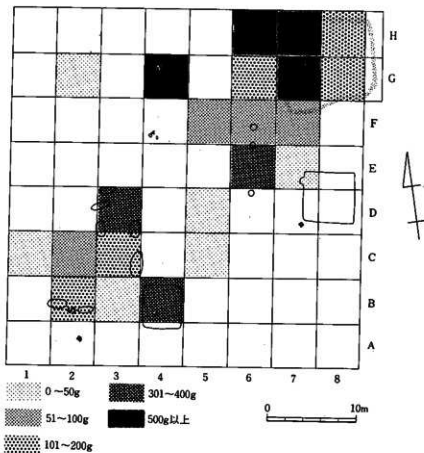
## 鉄滓出土分布について (第37図)

本遺跡出土の鉄滓総重量は5.9kgにもおよび、B地点のみについてその分布をみると第37図のようになる。その中心はE～Hの2・3区であり、かじや場遺構に当る地点である。他方B～Dの5～7区の墓址集中区からも鉄滓は出土しており、あとはG5区が目立つ。この図でみると、これら以外では出土が少く、鉄滓が本地点のどこにでも存在したものでないことを示している。特に大き

な鉄滓は一塊で0.5kg程もあり、これがかじや楊での製作に関わるものであることを裏付けている。

他にA・C地区でも少量の出土があった。

(神沢 昌二郎)



第37図 B地区鉄滓出土分布図

第1表 遺構一覽表

住居址 住居址番号	規模・形跡 (m)		主軸方位	柱	穴	カマド	備考
	長	幅					
1	6.8	5.9	N-86°-W	8(2)	西壁北	消失住居	第5号墓室に切られる
2	6.5	5.4	N-118°-E	0			東壁北寄り、石組み
遺 址							
住居址番号	規模・形跡 (m)		位 置	状 態・副 葬 品・そ の 他			
	長	幅		土 葬 器	副 葬 品	そ の 他	備 考
1	2.6	1.0	A C-3G	土葬器	焼石(こまれ大)		
2	1.8	1.0	A C-3G	"	焼石(こまれ大)	たらい状	
4	0.9	0.5	B A-7G	火葬器	焼石(人頭・こまれ大)	平 皿	
5	0.8		B B-5G	"	焼石(人頭・こまれ大)	重 状	木炭粉末・砂利器・土師製土片1点
6	1.0	0.8	B B-7G	"	焼石(人頭大)	皿 状	木炭粉末・土師器・須恵器・灰釉陶器・8号住を切る
7	0.5		B F-5G	"	焼石(こまれ大)	皿 状	木炭粉末・砂利器・3箇所小火焼付・灰釉土片・刀子・古鏡
8	0.7		B D-2G	"	焼石(人頭・こまれ大)	皿 状	
9	0.5		B G-5G	火葬器			火焼付・鉄片
10	2.8	1.0	B B-7・8G	土葬器	焼石(こまれ大)		
11	1.7	0.63	B B-7G	"	焼石(こまれ大)	砂利器	
12	3.0	1.1	B C-5・6G	"	焼石(人頭・こまれ大)	砂利器合	
13	2.1	0.9	B C-D-6G	"	焼石(こまれ大)	砂利器合・須恵器・灰釉陶器	
14	2.4	1.4	B D-6・7G	"	焼石(こまれ大)	砂利器合・須恵器	
15	2.1	0.8	B D-6G	"	焼石(こまれ大)	砂利器合	
16	0.5	0.18	B D-3G			平 皿	砂利分布・土師器
17	0.6	0.4	B E・F-8G		焼石(こまれ大)		砂利器合・土師器・鉄片
18	0.5		B F-8G		焼石(こまれ大)	平 皿	砂利器合
19	0.8	2.0	B H-3G	火葬器			火焼付・鉄片
20	1.5	1.0	B C-D-6G	"	須恵器大甕	皿 状	土師器・須恵器・灰釉陶器・新陶器・鉄片
21	0.9	0.8	C F-1G			平 皿	



第2表 遺物一覽表 (B地区)

第1号住居址

調査 番号	遺物 番号	類別	器形	寸法 (cm)			色		周	成形・調整・形跡の特徴	胎土	焼成	備
				口徑	底徑	残高	外面	内面					
	1	土器	杯	10.6	6.4	2.5	灰褐色	灰褐色	白	ロクロナデ・凹底糸切り皿	粗	不良	
	2	"	"	9.2	4.2	3.0	赤黄褐色	赤黄褐色	赤黄褐色	"	密	普通	児形
	3	"	"	10.2	4.6	2.8	赤黄褐色	赤黄褐色	赤黄褐色	"	密	普通	良
	4	"	"	10.2	5.8	3.0	赤褐色	明赤褐色	赤褐色	"	"	"	"
	5	"	"	9.8	4.8	3.0	赤褐色	赤褐色	赤褐色	"	"	"	"
	6	"	"	13.4	5.1	4.7	赤褐色	赤褐色	赤褐色	"・凹底糸切り皿	"	良	好
	7	"	"	13.2	5.2	4.4	赤褐色	赤褐色	赤褐色	"・本輪形	"	普通	普通
	8	"	"	13.9	7.7	5.0	明赤褐色	明赤褐色	赤褐色	"	密	普通	良
	9	"	"	14.2	5.5	4.4	暗黄灰褐色	暗黄灰褐色	暗黄灰褐色	"	密	普通	"
⑩	10	"	"	—	5.3	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	"	密	普通	"
	11	"	"	—	4.8	—	黒	黒	黒	"	粗	"	黒色土器
	12	"	皿	11.4	—	—	赤黄褐色	赤黄褐色	赤黄褐色	"	密	良	"
	13	"	皿	11.2	—	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	"	"	普通	"
	14	"	杯	11.6	6.8	4.7	赤黄褐色	赤黄褐色	赤黄褐色	"・凹底糸切り皿・外面へうらミガキ	粗	"	"
	15	"	"	10.6	—	—	赤褐色	明赤褐色	赤褐色	"・底部内面凹	"	"	"
	16	"	"	15.6	—	—	暗黄灰褐色	暗黄灰褐色	暗黄灰褐色	"	密	良	"
	17	"	"	13.6	—	—	灰褐色	灰褐色	灰褐色	"	粗	"	"
	18	"	埴	—	7.0	—	赤褐色	明黄褐色	赤褐色	ロクロナデの他外蓋ヨコナデ・フタ高台	"	"	普通
	19	"	"	—	7.2	—	赤褐色	黄褐色	黄褐色	ロクロナデの他内蓋へうらミガキ・"	密	"	"
	20	"	"	—	8.2	—	赤褐色	灰褐色	灰褐色	ロクロナデ・底部外面凹・"	"	"	"
	21	"	"	—	6.7	—	赤褐色	黄褐色	黄褐色	ロクロナデの他ヨコナデ・"	"	"	"
	22	"	"	11.0	5.2	4.9	黒	黒	黒	ロクロナデの他へうらミガキ・フタ高台へうらミガキ	磨面	良	黒色土器
⑪	23	"	"	16.6	—	—	暗黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色	ロクロナデの他内蓋へうらミガキ	密	普通	内黒土器
	24	"	"	—	5.4	—	赤黄褐色	赤黄褐色	赤黄褐色	ロクロナデの他フタ高台	粗	普通	"
	25	"	杯	8.7	4.8	2.5	黄褐色	黄褐色	黄褐色	内外蓋ヨコナデ形跡の後ナデ高台・凹底糸切り・不整形	密	良	ASBの上に置かれていた・児形
	26	"	"	9.4	4.5	3.0	黄褐色	黄褐色	黄褐色	"	"	"	ASBの下に置かれていた
	27	灰物埴	埴	13.0	7.2	2.9	白	灰白	灰白	ロクロナデの他へうらミガキ・底部へうらミガキ	"	"	"
	28	"	埴	—	7.4	—	白	灰白	灰白	ロクロナデ	"	"	"

29	区動陶器	罎	1.2.6	—	—	灰白	灰白	灰白	灰白	罎	良	
30	"	"	1.5.2	8.2	5.8	灰白	灰白	灰白	灰白	"	"	内面置石地区
31	"	"	—	8.2	—	灰白	灰白	灰白	灰白	"	"	

第2号住居址

調査番号	種別	器形	寸法 (cm)			色調		成形・調整・形跡の特異	胎土	焼成	備考
			口径	口径	口径	外面	内面				
1	土器	杯	14.1	8.4	4.2	赤黄	赤	コクロナギの地内蓋ナゲ調整・凹縁糸切り底	黄	良	
2	"	"	14.4	—	—	赤	赤	コクロナギ	"	普通	
3	"	"	16.3	—	—	灰褐	灰	コクロナギの後ナゲ調整・	粗	"	
4	"	"	—	4.7	—	赤黄	赤	"	"	"	
5	"	皿	12.8	6.0	3.4	赤黄	赤	"	密	"	
6	"	"	12.6	7.8	4.1	—	—	"	最密	良	
7	"	"	12.5	—	—	灰褐	灰	"	粗	普通	
8	"	罎	9.7	4.8	3.9	暗灰	黒	"	良	内黒土器	
9	"	"	—	3.8	—	赤	赤	"	"	普通	
10	区動陶器	"	15.2	7.6	7.7	明黄	灰	"	最密	良好	
11	"	"	—	6.4	—	—	—	"	"	"	
12	"	"	—	7.2	—	黄	灰	"	"	"	

かじや場

調査番号	種別	器形	寸法 (cm)			色調		成形・調整・形跡の特異	胎土	焼成	備考
			口径	口径	口径	外面	内面				
1	土器	杯	9.9	6.2	2.4	暗	暗	コクロナギ・底蓋ナゲ調整	粗	普通	
2	"	"	9.7	5.0	2.7	赤黄	赤黄	"	密	良	完形
3	"	"	10.6	4.8	2.9	—	—	"	粗	普通	
4	"	"	9.9	5.2	2.6	暗黄	暗	"	やや粗	"	完形
5	"	"	10.7	5.5	2.6	赤黄	赤	"	粗	"	
6	"	"	9.8	5.2	3.1	—	—	"	"	"	
7	"	"	9.8	4.0	2.7	—	—	"	粗	"	完形
8	"	"	10.2	4.0	2.8	—	—	"	粗	"	

調査 番号	器 別	器 形	寸法 (cm)		色		成形・調整・形像の特徴	粘土	焼成	備 考
			口 径	高	外 面	内 面				
9	土師器	杯	9.2	2.6	明黄褐	黒	ロクロナデ・回転糸切り底・調整組い	黒	普通	内黒土器
10	"	"	1.5.7	—	明黄灰	明黄灰	"・調整組い	やや粗	"	"
11	"	"	—	4.6	黒	黒	"・回転糸切り底	緻密	良好	内黒土器
12	"	"	—	4.5	明黄灰褐	明黄褐	"	密	普通	"
13	"	皿	19.6	—	明黄灰褐	明黄灰褐	"	"	"	"
14	"	"	19.1	—	赤黄褐	赤黄褐	内外面ナデ調整	"	"	高台文類
15	"	"	—	4.5	明黄褐	明黄褐	"	"	"	"
16	"	耳皿	5.7	3.0	黒	黒	ヘラミガキ	"	良好	黒色土器
17	"	盃	1.6.0	—	明赤褐	赤黄灰	ロクロナデ・高台接合の縁調整ヘラナデ	"	普通	"
18	"	杯	1.2.8	—	赤黄褐	赤黄褐	"	"	良好	"
19	"	"	1.8.5	—	明赤黄褐	明赤黄褐	ロクロナデの縁ナデ調整	"	"	"
20	"	"	1.0.1	—	暗黄褐	明黄褐	ロクロナデ・胴から口縁部にかけて内燻	緻密	"	"
21	"	杯	9.3	—	黒	黒	ヘラミガキ	滑	"	黒色土器
22	"	"	1.0.7	—	明黄褐	"	外面調整組い・内面粗いヘラミガキ	"	"	"
23	"	"	1.4.8	—	黒	黒	内外面ヘラミガキ	"	"	内黒土器
24	"	"	1.4.8	—	"	"	内外面ヘラミガキだがあまり丁寧ではない	"	"	黒色土器
25	"	"	1.4.4	—	赤黄褐	"	外面調整組い・内面ヘラミガキ	粗	"	内黒土器
26	"	皿	—	5.6	赤黄灰褐	赤黄灰褐	内面ナデ調整	密	"	"
27	"	皿	—	5.4	"	明赤黄褐	ロクロナデ・高台接合の縁調整ナデ調整	"	"	"
28	"	皿	—	7.7	赤黄灰褐	赤黄灰褐	高台のみ残存・底等とともにナデ調整	粗	"	"
29	"	杯	—	6.7	赤黄褐	赤黄褐	ロクロナデの縁外縁ナデ調整	密	"	"
30	"	"	—	4.0	赤黄褐	赤黄褐	内外面丁寧なヘラミガキ	緻密	良好	"
31	"	"	—	3.5	黒	黒	内外面ヘラミガキ	"	"	黒色土器
32	"	"	—	3.6	"	"	内外面ナデ調整	"	"	"
33	"	"	—	3.8	"	"	内外面ヘラミガキ・器厚うすい	密	普通	黒色土器
34	"	"	—	5.2	"	"	内外面ヘラミガキ	緻密	良好	黒色土器
35	"	"	—	6.0	暗赤褐	"	外面ナデ調整・内面ヘラミガキ	"	普通	内黒土器
36	"	"	—	7.5	赤黄褐	"	外面ヘラミガキ	"	"	"
37	灰土器	甕	4.1.5	—	茶灰	青灰	内外面口縁部ナデ	緻密	良好	内黒土器
38	灰土器	甕	—	—	灰	灰	外面及び口縁内面燻	"	"	"

器 種 番 号	器 種 名	口径	底径	保線	高	外	内	色	裏	底	文	形	寸法 (cm)	重量	出	所	備	
39	区輪陶器	碗	1.01	5.0	2.2	明赤区	明赤区	明赤区	明赤区	明赤区	明赤区	明赤区	1.01	5.0	2.2	明赤区	明赤区	底面高切り底
40	区輪陶器	碗	1.85	—	—	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	1.85	—	—	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底
41	区輪陶器	碗	—	6.9	—	灰白赤区	灰白赤区	灰白赤区	灰白赤区	灰白赤区	灰白赤区	灰白赤区	—	6.9	—	灰白赤区	灰白赤区	底面高切り底
42	区輪陶器	碗	—	5.9	—	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	—	5.9	—	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底
43	区輪陶器	碗	—	5.5	—	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	—	5.5	—	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底
44	土製品	口	—	—	—	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	—	—	—	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底

墓 址

器 種 番 号	器 種 名	口径	底径	保線	高	色		裏	底	文	形	寸法 (cm)	重量	出	所	備		
						外	内											
1	土器器	杯	1.42	5.1	3.9	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	1.42	5.1	3.9	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
2	区輪陶器	碗	1.24	—	—	明赤区	明赤区	明赤区	明赤区	明赤区	明赤区	1.24	—	—	明赤区	明赤区	底面高切り底	
3	区輪陶器	碗	1.61	—	—	灰白区	灰白区	灰白区	灰白区	灰白区	灰白区	1.61	—	—	灰白区	灰白区	底面高切り底	
4	刀子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	底面高切り底
5	銅鏡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	底面高切り底
6	銅鏡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	底面高切り底
7	土器器	杯	8.2	4.1	2.4	明赤黄陶	明赤黄陶	明赤黄陶	明赤黄陶	明赤黄陶	明赤黄陶	8.2	4.1	2.4	明赤黄陶	明赤黄陶	底面高切り底	
8	区輪陶器	碗	9.9	4.0	2.5	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	9.9	4.0	2.5	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
9	区輪陶器	碗	1.10	4.7	3.2	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	1.10	4.7	3.2	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
10	区輪陶器	碗	1.05	4.6	3.1	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	1.05	4.6	3.1	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
11	区輪陶器	碗	1.41	5.6	4.8	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	1.41	5.6	4.8	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
12	区輪陶器	碗	—	5.0	—	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	—	5.0	—	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
13	区輪陶器	碗	—	6.0	—	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	—	6.0	—	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
14	区輪陶器	碗	—	1.04	—	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	—	1.04	—	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
15	区輪陶器	碗	—	5.4	—	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	—	5.4	—	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
16	区輪陶器	碗	2.09	—	—	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	2.09	—	—	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
17	土器器	碗	1.02	5.4	4.1	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	1.02	5.4	4.1	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
18	土器器	碗	1.28	—	—	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	1.28	—	—	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
19	土器器	碗	1.19	—	—	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	1.19	—	—	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
20	区輪陶器	碗	1.25	—	—	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	1.25	—	—	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	
21	土器器	碗	1.03	4.5	3.1	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	赤黄陶	1.03	4.5	3.1	赤黄陶	赤黄陶	底面高切り底	

図番 番号	種別 器形	寸法 (cm)			色調		成形・調整・形跡の特徴	胎土 構成	備考
		口径	径	高さ	外面	内面			
23	土師器 杯	10.1	—	—	赤黄褐色	内面	内外面ナゲ調整・高台穴状	良好	20号黒土出土
24	土師器 碗	13.5	—	—	黒褐色	内面	口縁ナゲによるものが強くのこも	良好	内黒土器
25	灰輪陶器 (土師器)	11.9	6.8	2.2	青灰	青灰	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
26	土師器 輪花埴	11.5	6.1	2.0	青灰	青灰	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
27	土師器 段皿	13.0	6.0	2.2	黄灰	黄灰	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
28	土師器 段皿	13.7	6.4	2.2	青白灰	青白灰	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
29	土師器 輪花埴	14.6	6.7	6.3	灰白	灰白	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
30	土師器 段皿	14.9	—	—	灰白	灰白	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
31	土師器 段皿	13.0	6.3	4.4	灰白	灰白	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
32	土師器 段皿	16.1	8.6	7.1	黄灰	黄灰	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
33	土師器 段皿	14.5	—	—	黄灰	黄灰	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
34	土師器 段皿	12.3	6.1	2.3	青灰	青灰	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
35	土師器 段皿	11.0	6.2	2.1	黄灰	黄灰	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
36	土師器 段皿	28.9	12.7	(13.0)	青灰	青灰	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
37	土師器 段皿	—	—	—	茶灰	茶灰	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
38	土師器 段皿	—	—	—	明茶灰	明茶灰	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好
39	土師器 段皿	—	—	—	黄灰	黄灰	口縁ナゲ・回転糸切り底	良好	良好

遺構外出土の土器

図番 番号	種別 器形	寸法 (cm)			色調		成形・調整・形跡の特徴	胎土 構成	備考
		口径	径	高さ	外面	内面			
1	土師器 杯	13.6	6.1	4.0	茶褐色	茶褐色	口縁ナゲ・回転糸切り底	普通	A-5G
2	土師器 碗	8.8	4.8	2.5	茶褐色	茶褐色	口縁ナゲの後コナゲ調整・回転糸切り底	良好	A-6G
3	土師器 碗	13.6	—	—	明茶灰	明茶灰	口縁ナゲ	良好	A-5G
4	土師器 西耳壺	—	—	—	黄灰	黄灰	口縁ナゲ	良好	B-5G
5	土師器 段皿	10.4	4.9	1.5	青灰	青灰	口縁ナゲの後コナゲ調整	良好	B-2G
6	土師器 輪花埴	15.6	5.4	5.8	灰白	灰白	口縁ナゲ	良好	A-5G
7	土師器 埴	16.0	7.8	6.2	黄灰	黄灰	口縁ナゲ	良好	B-3G
8	土師器 埴	8.7	—	—	黄灰	黄灰	口縁ナゲ	良好	B-3G

9	灰結粉	塊	1.61	8.8	6.8	黄	灰	灰	ロクロナガの後コナダ調整・回転糸切り座・ツケ高台	密	良好	B-8G
10	"	"	-	7.6	-	灰	白	明粉灰	"	"	"	B-5G
11	"	"	1.26	-	-	黄	灰	黄	"	"	"	B-8G
12	"	"	-	8.1	-	灰	灰	白	・回転糸切りの後ナダ ・高台に担任座	"	"	"
13	"	"	-	6.4	-	灰	白	白	"	"	"	"
14	土節器	"	-	6.6	-	赤	黄	粉	ロクロナガの後内面ナダ	"	良	B-4G
15	粉結粉	"	-	5.6	-	赤	黄	粉	ロクロナガの後ナダ調整	"	"	B-8G
16	土節器	坏	9.9	5.0	2.9	赤	黄	粉	・回転糸切り座	"	密	A-6G
17	"	"	10.6	4.6	3.4	黄	灰	粉	"	"	"	C-4G
18	"	塊	-	5.4	-	赤	黄	粉	ロクロナダ・ツケ高台	"	別	C-5G
19	"	坏	10.8	-	-	赤	黄	粉	ロクロナガの後ナダ調整・回転糸切り座	"	密	C-4G
20	"	"	16.8	-	-	灰	黄	粉	ロクロナダ・内面ヘラヒガキ	"	別	C-8G
21	"	塊	1.81	-	-	赤	黄	粉	"	"	良	"
22	"	"	-	6.1	-	黄	灰	粉	ロクロナガの後ナダ調整	"	良	"
23	須磨器	四耳壺	-	-	-	青	灰	膏	内面ナダ調整・外面ナダ高台・突付部ナダ調整	"	"	C-6G
24	灰結粉	塊	-	-	-	灰	灰	灰	ロクロナダ	"	密	"
25	"	"	-	-	-	明	粉	灰	"	"	"	"
26	"	"	-	15.8	-	茶	灰	茶	灰	"	"	"
27	"	耳皿	-	-	-	明	粉	灰	内外面に染座	"	"	C-7G
28	"	徳花皿 (可動)	-	-	-	灰	白	灰	白	ロクロナダ・回転糸切り座	"	"
29	粉結粉	水	1.18	8.8	2.5	灰	白	灰	内面に染座	"	"	C-5G
30	概式土節器	標鉢	2.88	-	-	明	茶	粉	内面ミガキ調整・外面ヘラ削りの後ヘラナダ	"	密	C-6G・把手器
31	灰結粉	塊	-	18.1	-	灰	灰	灰	ロクロナダ	"	別	D-5G
32	土節器	壺	9.8	-	-	灰	粉	黒	ロクロナガの後内面ミガキ調整	"	"	D-5G
33	"	坏	14.2	6.8	3.6	赤	黄	粉	ロクロナガの底ナダ調整	"	"	E-3G
34	"	壺	-	12.1	-	黄	粉	明	ロクロナガの後外面ヘラヒガキ・細部内面染座のみ	"	"	良
35	灰結粉	短壺	14.8	-	-	明	粉	灰	内外面に染座	"	"	良
36	"	三耳壺	9.2	-	-	粉	灰	灰	ロクロナダ・外面に染座	"	"	D-6・6G
37	灰	壺	18.9	-	-	灰	白	灰	"	"	"	良
38	"	"	-	10.4	-	青	灰	粉	"	"	粗	D-5G
39	"	"	-	15.6	-	白	灰	白	"	"	密	D-1G
40	"	"	-	8.9	-	黄	灰	灰	内面ロクロナダ・外面ヘラ削りの後ナダ調整	"	や	D-5・6G
41	"	"	-	18.5	-	粉	灰	粉	ロクロナダ	"	"	E-5G

調査番号	種別	形状	寸法 (cm)			色			成形・調整・形物の特徴	粘土構成	備考
			口徑	底徑	高さ	外面	内面	断面			
42	皿	段	12.6	5.8	2.2	赤灰	赤灰	赤灰	ロクロナデ・底部へう削りの後ナデ調整	良	D-5G
43	"	"	11.8	5.5	2.4	明緑灰	明緑灰	"	"	良	D-6G・黒色焼り直
44	"	塚	—	7.4	—	赤黄灰	赤黄灰	"	"	良	E-80・"
45	"	輪花塚	—	4.8	—	灰	明緑灰	"	"	良	D-4G
46	磁胎内器	塚	—	6.8	—	緑	赤茶	"	"	良	E-2・8G
47	土師器	塚	3.5	—	—	赤黄	赤黄	"	"	良	P-3G
48	"	塚	3.7	4.7	2.7	赤黄	赤黄	"	"	良	P-2G
49	"	羽蓋	—	—	—	赤	赤	"	"	普通	P-8G
50	"	塚	3.4	3.7	2.9	赤茶	赤茶	"	ロクロナデの後へうライダ、回転糸切り直	良	P-3G
51	"	塚	1.4	—	—	赤黄	赤黄	"	形によるワイルナデ	良	P-2G
52	"	"	1.25	—	—	赤黄	赤黄	"	ロクロナデ・底部無いたデ、回転糸切り直	普通	P-8G
53	"	塚	—	6.7	—	赤黄	赤黄	"	"	良	P-2G
54	"	"	—	5.4	—	黒	黒	"	"	良	"
55	"	"	—	5.2	—	赤黄	赤黄	"	"	良	"
56	"	"	1.8	—	—	黄	赤黄	"	口縁部内面に2条の沈線	良	P-2・8G
57	"	"	—	6.8	—	赤	赤	"	"	良	P-2G
58	"	塚	—	7.8	—	赤黄	赤黄	"	"	良	P-2G
59	"	—	—	4.2	—	黒	黒	"	内外面へうライダ	やや良	"
60	区輪内器	塚	2.7	—	—	赤	赤	"	"	良	"
61	"	"	—	17.8	—	灰	白	"	内外面へう削りの後ナデ調整	良	P-2・8G
62	"	"	—	12.4	—	青	白	"	"	良	P-2・8G
63	"	塚	10.7	5.7	2.5	灰	白	"	内外面へう削り	良	P-2・8G
64	"	"	10.6	—	—	灰	白	"	ロクロナデ・回転糸切り直	良	P-8G
65	"	"	10.8	—	—	"	"	"	"	良	E・P-2・8G
66	"	"	—	—	—	"	"	"	"	良	"
67	"	"	12.4	—	—	"	"	"	"	良	P-2G
68	"	塚	10.9	—	4.8	灰	白	"	回転糸切り直	良	"
69	"	"	1.8	—	—	灰	白	"	体部下半コロボ削り	良	P-2・8G
70	"	"	—	—	—	灰	白	"	外周下半コロボ削り	良	P-2G
71	"	"	—	7.1	—	"	"	"	底部無いたデ	良	"





図番 器名 寸法	器形	寸法 (cm)		色		成形・調整・形態の特徴		胎土	焼成	備	考
		口径	底径	器高	内面	外面	内面				
105 土師器	杯	9.2	4.6	2.7	赤褐色	黒	ロクロナガテの後ナガ陶器	青	員	美保	
106 灰胎器	碗	—	8.1	—	灰白	灰	— 凹底未切り底	青	員	美保	
107	皿	—	18.6	—	灰白	白	ロクロナガテ・外面ヘナガ陶器	青	員	美保	
108	碗	18.6	—	—	明緑灰	灰	— 口縁部内側に一条の沈線	青	員	美保	

第3表 陶磁器一覽表

図番 器名 寸法	器形	寸法 (cm)		文様・施繪・色調	素地	備	考
		口径	底径				
1	陶器	—	6.6	—	暗灰色	良	瀬戸灰胎系・180℃~器末
2	茶碗	—	4.1	—	灰色	密	— 器末か
3	碗	—	4.6	—	灰色	密	— 器末か
4	碗	18.4	—	—	灰	良	— 180℃~器末
5	碗	—	5.3	—	黄灰色	密	—
6	茶碗	—	3.7	—	灰	良	瀬戸系か・昭和年代
7	灯明皿	11.4	6.1	1.8	灰	密	瀬戸灰胎系・器末頃
8	碗	—	8.5	—	黄灰色	良	瀬戸灰胎系・180℃~器末
9	碗	—	—	—	灰白色	良	— 器末頃
10	碗	16.0	—	—	灰白色	良	— 器末頃
11	茶碗	3.0	—	—	暗茶色	良	— 器末頃
12	茶碗	3.3	—	—	暗茶色	良	— 器末頃
13	茶碗	—	—	—	灰青白色	良	— 器末頃
14	茶碗	—	—	—	白	密	瀬戸灰胎系・明治以降
15	茶碗	—	—	—	灰	密	— 180℃~器末
16	茶碗	—	—	—	白	密	瀬戸系・大正時代か
17	碗	10.6	—	—	白	密	— 明治以降
18	碗	—	—	—	白	密	— 明治以降
19	碗	10.1	—	—	白	密	— 明治以降
20	茶碗	—	—	—	白	密	伊万里系・180℃頃
21	茶碗	8.9	—	—	灰	良	瀬戸系・明治以降
22	茶碗	—	—	—	白	密	瀬戸灰胎系・器末頃か
23	茶碗	—	—	—	白	密	瀬戸系・明治以降
24	茶碗	—	—	—	灰	良	瀬戸灰胎系・器末頃か
25	茶碗	—	—	—	白	密	瀬戸系か・明治以降
26	火鉢	—	—	—	灰	良	瀬戸灰胎系・器末頃か
27	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
28	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
29	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
30	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
31	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
32	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
33	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
34	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
35	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
36	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
37	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
38	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
39	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
40	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
41	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
42	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
43	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
44	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
45	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
46	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
47	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
48	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
49	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
50	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
51	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
52	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
53	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
54	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
55	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
56	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
57	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
58	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
59	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
60	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
61	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
62	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
63	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
64	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
65	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
66	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
67	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
68	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
69	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
70	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
71	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
72	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
73	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
74	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
75	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
76	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
77	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
78	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
79	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
80	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
81	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
82	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
83	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
84	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
85	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
86	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
87	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
88	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
89	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
90	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
91	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
92	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
93	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
94	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
95	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
96	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
97	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
98	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
99	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か
100	火鉢	—	—	—	灰	良	— 器末頃か

第4表 鉄製品・石器等一覧表

1. 鉄製品

遺物番号	種別	寸法 (cm) ( )内 現存値			出土地点	備 考
		長さ	巾	厚さ		
1	型状鉄製品	径 3.6	0.9	0.5	E-3G	
2	刀 子	(20.1)	1.4	0.3		
3	"	(10.0)	1.3	0.3		
4	和 釘	—	1.1	0.6	F-2G	先端部屈曲・断面長方形
5	"	10.5	0.7	0.7		先端部屈曲・断面方形・長方形
6	"	7.5	0.5	0.4		断面方形
7	"	9.0	0.6	0.5		断面方形
8	刀 子	—	1.5	0.7	E-5G	
9	"	(8.1)	1.0	0.4	B-6G	
10	" ?	(6.9)	1.3	0.4	D-2G	
11	和 釘	(4.5)	1.1	0.5	"	
12	?	3.8	1.3	0.5		
13	和 釘	(14.0)	径 0.5			断面円形
14	?	(8.2)	0.8	0.5	G-5G	
15	?	(7.2)	径 0.4			断面円形

2. 石 器

遺物番号	種別	寸法 (cm) ( )内 現存値			重量 (g)	石 質	出土地点	備 考
		長さ	巾	厚さ				
1	石 鏃	2.2	1.5	0.4	1.08	黒曜石	D-2G	鍔茎・基部残い C地区
2	"	3.4	(1.8)	0.4	1.48	"	G-7G	片断欠損・鍔茎
3	"	2.0	(1.7)	0.3	0.46	"	H-3G	片断欠損・鍔茎・基部残い
4	"	2.7	2.0	0.3	1.25	"	?	有茎・側辺部S字状曲線呈す
5	スクレーパー	3.9	2.5	0.9	8.41	"	?	
6	打製石斧	14.9	7.2	2.5	378.0	砂 岩	H-5G	
7	"	10.7	4.9	1.6	194.1	粘板岩	D-4G	側部内彎する
8	"	11.1	5.0	1.6	107.6	"	A-6G	
9	"	9.6	5.2	1.4	89.4	"	D-3G	
10	"	10.2	5.8	2.0	148.2	"	A-6G	
11	"	(14.7)	10.1	3.2	550.0	砂 岩	D-1G	
12	"	(7.8)	6.6	1.8	125.6	粘板岩	D-3G	
13	"	(9.2)	4.8	2.0	94.0	"	C-4G	
14	"	(10.0)	9.6	1.7	284.6	砂 岩	E-2G	
15	磨製石斧	12.8	5.4	1.7	206.4	"	?	先端両面研磨しているが丁寧ではない
16	横刀型石器	10.7	3.9	0.8	47.2	粘板岩	A-3G	
17	"	8.4	4.6	0.9	53.7	—	B-6G	
18	すり石	10.6	3.7	5.4	700.0	砂 岩	かじや堀	

3. その他の遺物一覧表

遺物番号	種別	寸法 (cm)			出土地点	備 考
		長さ	幅または巾	厚  さ		
1	羽 口	12.2	8.0		C-4G	完形
2	"	—	—		A-8G	
3	"	—	—		C-4G	
4	"	—	—		F-8G	
5	"	—	—		F-2G	
6	"	—	—		F-8G	
7	砥 石	11.2	6.2	2.4	B-8G	4面使用・長さ1.5mm程の沈線あり
8	"	7.4	2.4	1.6	E-2・8G	端部欠損・使用箇所4箇所認め・粘板石質で10と形状類似
9	"	—	4.6	2.2	B-5G	欠損部あり・磨痕あり・2面使用
10	"	—	3.2	1.8	G-5G	欠損部あり・4面使用・粘板石質で8と形状類似
11	"	8.1	4.8	3.2	D-1G	1面使用
12	不 明	15.4	14.4		G-4G	宝篋印塔か
13	銅 鏡		2.4		A地・D-4G	「元壺通寶」
14	"		2.3		H-4G	「開元通寶」
15	石 臼	—	—	2.5	G-4G	上臼

## 第4章 調査のまとめ

### 第1節 長野県内における平安時代の「火災住居」をめぐって

#### 1. 問題の所在

今回調査の第1号住居址は多量に出土した炭化木材と遺物のあり方から、一応、「火災住居<sup>(1)</sup>」と捉えた。しかし、一般に、炭化木材等の存在から、その住居址が不慮の火災により、それまで継続してきた日常生活の痕跡を顕著に止めたまま廃絶、やがて埋没したものと断定していることには若干の疑問が残る。すなわち、その住居址はほんとうに不慮の火災に遭遇しそのまま廃絶されたものかどうか、また、発見される炭化木材はほんとうに上屋の建材なのか、出土する遺物は果たして生活用具一式がそのままの位置にあるのか等々の疑問である。

ふりかえてみると、長野県内に限っても、縄文時代から歴史時代までの「火災住居」が数多く報告されており<sup>(2)</sup>、中には研究史上に良好な資料を供した例もある。そして、そのほとんどは、日常生活中の不慮の火災にあって廃絶、埋没したが如き前提（先入観の方が確かかもしれない）に蓋いで観察されているようにみえるのである<sup>(3)</sup>。この様に捉えられた「火災住居」から出土した豊富な遺跡は、当時1軒の住居の居住者が保持していた道具のセットとして把握されたりし、また炭化木材はその位置や組み合わせから上屋建築に言及する好資料となったりした。「火災住居」は当時の日常生活を如実に物語るタイムカプセル的な理解がなされてきたと言っても過言ではないだろう。

しかし上記の前提となっている、「火災住居」が不慮の火災に遭遇したものであるという点の是非に触れようとした報告は、残念ながら非常に少ない。この様な動きの中で「火災住居」の中に実は火災発生前に既に廃絶していた可能性のあるものを具体的に指摘したのは桐原健氏である。桐原氏は長野県内の縄文中期後半の縄文住居址を集成するなかで、伊織石が抜去されている住居址に着目し、「出火の際、その家から逃げ出す者は居なかったのである。」と象徴的な表現をされている（桐原 1976）。人為的な火災（焼却処分など）も考慮に入れねばなるまい。

本稿では、今回発見された本遺跡第1号住居址に代表される平安時代の「火災住居」を、長野県内に限って可能な範囲で取り上げ、共通の観点から、実際に火災住居として認定してよいかどうか、またその廃絶と火災の関係はどうかを検討してみたい。第5表は長野県内で発見された「火災住居」のうち報告者により時期が平安時代とされたものの一覧である。万一、見落としがあった場合、御指摘いただければ幸いである。

第5章 長野県における平安時代の火災住居一覽

○印 有 Δ印 有と推定されるもの

番号	遺跡・住居名	所在地	上段：炭化木・土等の状態、下段：遺物の出土状況	炭化材	炭化材	炭化材
1	福慶 沢 1号住	茅野市	炭土の厚さ10cm。その中に炭化材が中央に向かう。中央部面から炭化種子、炭材。カヤが2箇所集中。 比較的多い。図示なし。そのうち1本。	○	△	○
2	料の木山 12号住	〃	床面上に炭土・炭化物。ローマブロンズ製の茶碗の土層。この層中に集中して炭化した炭材。 「カマド周辺に多い。」 図示22	○	△	○
3	料の木山 1号住	〃	自然発火の遺物の層に付いて四角状に炭化材の層が厚み。炭化材間にススキの炭化茎。 図示14 「カマド周辺の床面と突き合っていて炭化材。ススキの炭化物。」「層が厚く残って本層に貼りついた状態か?」	○	○	○
4	新井 南 10号住	岡谷市	炭土すべり床より15cm以上の黒色の土層中。炭化に覆って炭化か。その際の「遺物」 「遺物の出土層は少ない。その出土状態も特定の層中に集中せず任意層にわたる。」	○	○	○
5	新井 東 2号住	〃	炭化材・土層と炭層下に炭土。北西側に炭化材。	○	○	△
6	本 城 20号住	諏訪市	全面的に炭化物・炭化材及び炭土。	○	○	○
7	本 城 20号住	〃	図示7	○	○	○
8	足 場 6号住	諏訪市	数箇所に炭土に2~3cmの炭土。	○	○	○
9	手洗 沢 1号住	〃	中央部から北東部寄りに炭土と炭化材。 図示7。うち炭化4。	○	○	○
10	原 沢 尾 29号住	原 村	床面上に炭土層。「カマドの遺物からみて炭化は炭か?」 「炭土上に10~50cm程付いて出土。」 図示11。うち炭化1。炭化遺物271	○	○	○
11	原 沢 尾 29号住	〃	床より10~15cm程付いて炭化物。床を指し物に炭層15cmの厚さで炭土。炭化カヤ。 「炭層」遺土も炭土層」炭土以上での出土が多く、炭化層の厚さの可塑性あり。	○	○	○
12	大 石 46号住	〃	多量の木炭片と炭材らしきカヤの炭化茎が8cmの厚さで残る炭土に含まれる。 厚さ2片。	○	○	○
13	月 屋 尾 27号住	伊 藤 市	炭土の厚さ10cmに多量の木炭及び炭土。 遺物に炭化茎。	○	○	○
14	月 屋 尾 68号住	〃	中心に炭か。付いて厚さは炭層の多量の炭化材。 図示16。炭化材中。炭層から出土。	○	○	○
15	細 子 田 1号住	〃	床面上に炭の層のよこごころに炭化した材木が床面に残存して出土。 カマド内より。床面よりわずかに付いて、炭化物に炭化して刀子する。	○	○	○
16	細 子 田 9号住	〃	炭材の炭化が顕著。	○	○	○
17	小 淵 堂 2号住	〃	床面から10~15cm位に多量の炭土と木炭。	○	○	○
18	藤木谷中畑 6号住	〃	炭土層にかたりの炭土と炭化材。木炭の層中。	○	△	○
19	おぐし 沢 1号住	〃	床面層と推定できるレベル面に、多量の炭土と炭化物。	○	○	○
20	宮 道 外 1号住	〃	床面上に多量の木炭。	○	○	○
21	中通り 下 2号住	駒ヶ野市	床面上に部分的にかたりの炭土の層。	○	○	○
22	原 道 外 27号住	〃	炭土と炭化物が厚く残存。炭化物に炭化茎とどめるものは少ない。	△	○	○



## 2. 火災の認定について

「火災住居」から検出される、火災を認定できる主な材料は、上屋建築諸材の炭化木材や木炭粒、茅などを主体とする炭灰層、床面・壁面の焼土化(焼土面)、遊離した焼土塊・焼土粒が想定できる<sup>(4)</sup>。第5表の右端に各住居址の報告記述に基き炭化木材・炭灰層・焼土塊・焼土面の有無を表してみたが、それらはいくつか組み合わせされており、次の様になる。

A:炭化木材、焼土塊が存在	16例
B:炭化木材、炭灰層、焼土塊が存在	10例
C:炭化木材、炭灰層が存在	6例
D:炭化木材のみが存在	6例
E:炭化木材、焼土塊、焼土面が存在	3例
F:焼土塊のみが存在	3例
G:炭灰層、焼土塊が存在	1例
H:炭化木材、炭灰層、焼土面が存在	1例

これについては、状況にもよるが、火災と認定する最重要なものは炭灰層の存在であって、焼土塊や部分的な焼土面だけでは認定の理由にならず、炭化木材を伴うとしても認定には慎重な検討を要するという、寺沢薫氏の、復元住居の火災事故に基く実験考古学的な考証がある(寺沢 1979)。寺沢氏の見解を積極的に支持すると、前記F群を火災住居と認定するのは問題であり、A・D・E群も炭化木材などの出土状態の詳細な検討が必要であろう。次に、炭化木材、炭灰層、焼土塊、焼土面について、それぞれ具体例をひろってみる。

**炭化木材** 実際の発掘で「火災住居」認定の柱になるのは炭化木炭の存在によっていることは正直なところ事実である。ただ、炭化木材の遺存状態が図示されている住居址の報告に限ってみても残存のし方にいくつか型がみられる。典型的なものは、月見松68号(第5表14)、判の木山東1号(同3)など、大小の炭化木材が住居址中央部から放射状を呈してひろがる状態で検出されるもので、住居址内に遺存する炭化木材の量の他例に比して相対的に多い。次に、かなり多量の炭化木材が検出されるが、遺存状態にあまり規則性をもたない型として、頭殿沢1号(同1)、新井南10号(同4)、部分的に規則性があるように感ぜられるものとして、神戸1号(同42)、判の木山西12号(同2)がある。これらに対して、炭化木材があまり検出されなかつたり(足場6号、居沢尾根29号)、塊として測図不能な壁に細片になっている例もみられる。この違いは、残存している炭化木材がすべて住居の上屋建材と仮定した場合、ある程度は火災時の燃焼度合いの差として解釈されよう。すなわち、上屋建材がすべて炭化崩壊して原形を止めなくなる程焼きつくしたきわめて強く長時間の火災から、上屋建材の組み方がわかるくらいの炭化木材を残した弱い火災まで、その住居を見舞った火災にも、状況によって種々あったのであろう。しかし、残存している炭化木材のうち、一部または

すべてが上屋建材ではないという想定によっても、炭化木材の不規則な形での遺存の型は説明でき得る。

**炭灰層** カヤ等を主体とする屋根材の解体炭化物（炭灰層）の存在こそが「火災住居」としての認定に必須とされる<sup>63)</sup>。県内例でも「スキヤの炭化物」「カヤ、ヨシの炭化物」「禾本科植物の炭化したもの」等と報告されているものがこれにあたる。炭化木材と異り形状が明確に捉えにくいため実測図に図示され得ない例が多く、報文でも炭化木材と混同されて単に炭化物として扱われているものもかなりあると推定される。炭灰層に相当するものが存在しないと明記されているか、それに類するニュアンスをもつ記述（たとえば焼土しかない等）以外は、実際には存在していた可能性が高いとみるべきであろう。

**焼土塊・焼土面** 床面、壁面が熱を受けて焼土化すること（焼土面）は充分起こり得るはずだが、存外事例が少いようだ。床面が焼けていたという記述は2例、壁面に及ぶものは1例のみである。床面、壁面が焼土化するほどの強い火災は少かったのであろうか。あるいは、焼土塊、炭化木材に注目するあまり、焼土面の観察・記述がおろそかにされていることも考えられる。ただ壁面などは崩落して、遊離した焼土塊の一部となっている場合もあろう。この遊離した焼土塊については成因を、焼土面の崩落の他に、壁上や屋根の上にあった土が焼けたもの、火災の際消火のために土を投げ入れたもの<sup>64)</sup>と考えている報告もある。しかし、いずれの考え方も、それだけでは各事例における焼土塊存在の原因を、明確に説明できない。

### 3. 住居の廃絶と火災

ある「火災住居」の住居としての終焉が火災に起因するものなのか、すなわち火災と同時に廃棄されたのかどうか。その問いの回答によっては、その「火災住居」は日常生活中不慮の火災に遭ったのではなく、従って、出土する遺物の組成、炭化木材の配置に当時の生活を直接投影させることはできなくなる。火災が先か廃絶が先か、この問題は先に引用した桐原氏の論考（桐原 1976）以外にも、いくつかの報告で扱われている。たとえば、経塚2号（第5表1）では、炭化材、焼土すべてが床より15cm浮いており、「火災に遇って廃絶かその逆の経過」と報告されている<sup>65)</sup>。また宮の原北1号（同27）も覆土中より炭化材が出土することから「住居廃絶後に火を受けたのではないかと指摘されている<sup>66)</sup>。これらの理由を集約すれば①カマド、炉の破壊がある、②炭化材が床より浮いている、の2点になる。カマドの破壊については火災後の破壊や、住居址内で炉に比して高い位置にあるための耕作等、後世の攪乱もあろう。このため周囲の土層を含めた平面、断面での慎重な観察結果に基づかなければ、カマドの破壊から住居の火災と廃絶の前後を決める資料とはなり得ない。炭化材（炭化木材、炭化物等）の床面浮上についてはどうであろうか。火災と廃絶の前後関係に言及していない報文にも炭化材が床面より浮いていた、あるいは、床上にいくらかの土層堆積があった上部に炭化材、焼土等が存在したというものがいくつかみられ（第5表3、11、23、29）、この現



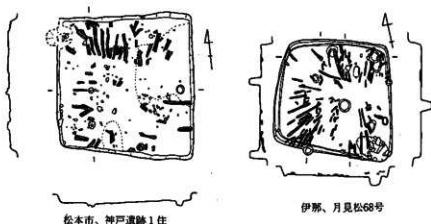
象は詳細に観察すると、かなり多く例にのぼるかと推測される。その一方で、床面に炭化木材等が密着していた、または床面直上から出土したと明記されている報告も少からずあり、火災時の状況に違いがあったことは明らかである。炭化材浮上の原因は、前述のように住居廃絶と火災発生の間にへだたりがあり、若干の覆土が形成されたという見解が有力だが、上屋建材の炭化崩落が不完全または床上の敷物のため浮上するという、火災と廃絶を同時と捉える、全く逆の考えもある。

遺物の出土状況も火災と廃絶の前後関係に問題を投げかける。とは言え今のところ、遺物が床面上から日常生活中そのままらしき状況で出土したために火災でその住居が廃絶したと解釈している報告は見あたらず、かえって「火災住居」ゆえにその様な出土状態を呈すという論法が行われるのが常である。しかし「火災住居だから」という先入観を除いて、出土状態を検討する必要はあろう。実際に遺物の量、床面からの浮き具合で、かなり異なった事例がみられる。多量の遺物がまさに「生活そのもの」の形で出土した例として、内田原1号(第5表41)がある。ここの遺物は、床面上に厚く堆積した炭化物中より出土しており、遺物の廃棄(その場合は放棄、放置)と火災の同時性が強く窺え、ひいては住居の廃絶と火災の同時性をも想起される。これに対し居尻尾根32号(同11)では、遺物の量は豊富だが床面より浮いており「火災倒壊後の廃棄の可能性」を報告者自身も認めている。また、遺物の量が非常に少い例としては、経塚2号(同5)、大石45号(同12)等がある。だいたい以上の3類例かのどれかに他の例もあてはまる。このうち遺物が床面より浮上している例は、住居址内に施設や厚い敷物があったり<sup>(9)</sup>、壁上に遺物が載せられていたと説明されるが、では床面上から遺物を出土する例においては全くそういうことがなかったのかどうか、はなはだ疑問である。やはり、浮上している遺物は、住居址内にある程度覆土の堆積があったのちに廃棄されたと考えた方が、相対的にみて自然と思える。遺物量の少い例は、①使える土器類を持ち出したのち火災の発生があった(廃絶のち火災)のか、②火災後、焼け跡から完存品を掘り出し持ち去ったか、③その住居構成員は本来たいした量の土器類等を保持していなかったか、のいずれかの場合が想定できる。しかし③を裏返せば、小破片を少量しか保持していなかったことになり、その様な事はおよそ考えられない。また②の場合、割れてしまったものはとり残され、出土量がある程度の量になると思うのだが、その辺が釈然としない。火災前にいくらかの運び出しがあった、すなわち火災は予期されたものと見たい。

炭化木材の出土状況及び遺物の出土状況の検討からすると、火災が直接住居廃絶の引き金になったのではないと考えざるを得ない例がいくつかあることがわかる。住居が廃絶してある程度の覆土の堆積があった後に起こる火災とはなんなのであろう。日常生活での失火とはとうてい考えられない。近隣の火災や野火・山火事からの飛び火を原因として挙げることはできる。しかしそれよりも人為的な放火、上屋材・廃材の焼却、廃絶堅穴利用の焚火などを想定した方が、より状況にふさわしいのではないかと思う。これらを「火災住居」と呼称してよいのかどうかも問題のあるところと言えよう。ただ「火災住居」ないしは「焼失住居」・「罹災住居」という用語の概念定義は、なかな

か共通の基準を用い得ず、困難なことと思う。周到で精密な観察結果の、今少しの集積が必要であらう。

(直井雅尚)



第38図 火災住居例実測図

注

- (1) 「火災住居」という呼称の他に「罹災住居址」「焼失住居」とも表記される。
- (2) 縄文時代は遅くも前期末から中期にかけて、また弥生～平安時代を通じて報告されている。
- (3) 日常生活の中の不慮の火災に遭って廃絶したことは動かし難い前提であるごとく、検出されるすべての状況を、その前提に無理につじつま合わせをするように、かなり恣意的な解釈をしているものもある。
- (4) この分類は(寺沢 1979 参考文献2)を全面的に参考にした。
- (5) (寺沢 1979 参考文献2)による
- (6) 「(前略)住居址内にみられる多量の焼土は、住居が焼けた時に直接火のあたる部分、即ち高い所にあった土が焼けたものと考えねばならない。考えられる高い所とは屋根の上か壁の上にあたる部分であろう。」(越田 1977 参考文献8)  
「生活時に火災にあったようで、火を消すために土をかぶせたのか、東半部にかけて焼土塊が見られ、その下に木炭が多くあった。」(神村 1977 参考文献9)
- (7) 参考文献10
- (8) 参考文献13
- (9) 「(前略) 竪穴を構成するローム床の上には少なくとも10～20 cmの厚さの、粗染・枯草などの敷物があり、ほとんどの器物はその上に置かれていたための現象とみるべきで、火災に遭遇した竪穴の場合などは、15～20 cm上った含炭黒土層上から土器が大量に発見される場合がある。」(林 賢 1967 参考文献12)

参考文献（本文のみ）

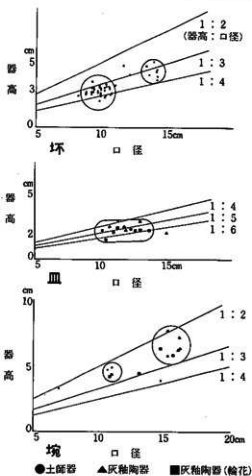
1. 桐原健「土器が投棄された廃屋の性格」（『考古学ジャーナル』N0127）1976
2. 寺沢薫「火災住居覚書—大阪府観音山遺跡復元住居の火災によせて—」（『腎談』40）1979
3. 小林正寿他「昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査書—伊那市内（その2）」1974
4. 百瀬長秀他「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その2—昭和51年度」1979
5. 福沢幸一他「昭和50年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—岡谷市（その3）」1976
6. 小林秀夫他「昭和51・52年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その3—」1981
7. 岡田正彦他「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪郡富士見町その1—昭和48年度」1974
8. 神之木台遺跡調査グループ「神之木台遺跡における弥生時代の遺構と遺物」（『港北ニュータウン調査研究集録』3）1977
9. 神村透他「長野県木曾郡お玉の森遺跡—平安時代の後半の集落」1977
10. 樋口昇一他「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—岡谷市その4—昭和52・53年度」1980
11. 原嘉藤・山田瑞穂「長野県塩尻市内田原遺跡調査概報」（『信濃』III・21—6）1969
12. 岡谷市教委「瀬戸—岡谷市瀬戸遺跡第1次調査報告」（『長野県考古学会研究報告書』2）1967
13. 林茂樹他「高遠宮の原遺跡発掘調査報告書」1978

## 第2節 出土土器、陶器について

本調査では多量の土器類が検出された。松本市内の発掘調査例からみると、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器とも、いずれも今回の出土量が最高であって、その点からしても土器類については詳細な報告をせねばならないところではあるが、時間的制約もあって前述のように概略してふれたにすぎない。本稿ではそれらを僅かでも補うために、器種を中心として考えてみたい。

出土遺物は器形のはっきりしているものを主にして約230点を図示したが、その主体は土師器である。土師器には皿・杯・壺が多く、他には耳皿・銅釜・甕がごく少量検出されたのみである。全体をみると大型のものはほとんどない点の一つの特徴を見出せる。灰釉陶器は皿・段皿・壺・瓶・短頸壺・三耳壺で、これもそのほとんどは皿・壺で瓶がそれに次いでいる。須恵器は四耳壺片を除いて全てが大甕である。ただ酸化炎焼成の須恵器かと思われる杯が2点あったが、土師器に含めておいたものがある。次に緑釉陶器は皿・壺・水瓶で、皿・壺が圧倒的である。中世から近代の陶磁器は皿・灯明皿・茶碗・甕・摺鉢・小瓶・火舎などでいずれも小破片であった。

器種について 土師器、灰釉陶器、緑釉陶器で口縁部を含めて器形の判明するものを選んで分類を試み、本遺跡の傾向を推し測ろうとした。原則的には壺は杯に高台のあるものとし、杯と皿の区分は明確ではないが器形、寸法により分類した。これら杯・皿・壺については 1、口縁部が直線的に上るもの、2、口縁部が内弯するもの、3、口縁部が外反するものと三分し、更に黒色処理、輪花の有無などについても細分した。その代表的なものは第39図に示したが、それを数字で表わすと、第6表のようになる。つまり杯(A, a)はa 1が多く次いでA 3で、杯は全体の48.8%を占める。皿(B I)は灰釉陶器、緑釉陶器にもあるので複雑になるが、更に輪花(B II)、有段(B III)でも分けた。その結果、土師器の皿は全て高台付で、灰釉陶器の皿はほとんどがB II・B IIIで細分するとB II 1、B III 3が多い。壺(C 1)は内黒



第39図 杯・皿・壺寸法図

(CII)、黒色土器(CIII) 輪花埴(CIV)が少く、灰釉陶器のCI3が多いことが窺える。灰釉・緑釉陶器は表示した中では30%、更にその6割が埴である。灰釉陶器の埴の中における輪花埴の割合は27%で、輪花埴に一つの意味を感じさせる。

松本市三才山七本松遺跡からは、土師器・須恵器・灰釉陶器の出土をみているが、中でも土師器杯の量が圧倒的に多いとあり<sup>(1)</sup>、また塩尻市内田原遺跡でも、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器のうち、土師器杯が全体の40%近くを占めている<sup>(2)</sup>。また灰釉陶器の出土量については七本松遺跡ではやや少く、内田原遺跡が20%強であるので、本遺跡の30%は須恵器を扱っていない点を差引けば、ほぼ同様の数字になると思われる。

杯・皿・埴の寸法についてみれば第39図のグラフのごとくであり、杯は口径10 cm、器高3 cm内外の一群と、口径14 cm、器高4.5 cm内外の群とに別られる。しかしそのほとんどは前者に属している。皿については口径については5～9 cm内外とバラツキはあるが、器高は2～3 cm とほとんど一定しており、その用途の必要性から高さが生じているものと窺える。埴は資料が少ないがこれも口径9 cm、器高4～5 cmの一群と、口径16 cm、器高7 cm内外の一群とに分けられるが、大型の物は全て灰釉・緑釉陶器であり、小型の物は土師器を含んでいる。なお口径7 cmに満たない黒色土器の埴が1点ある。

灰釉陶器について 灰釉陶器の器種・数量については上述したが、これが産地について一考してみたい。松本市内の灰釉陶器については「瓷器の道」(1)<sup>(3)</sup>では猿投、尾北、東濃、美濃須衛それぞれの埴・皿・長頸瓶が出土しており、産地別の数量はほぼ均一である。本遺跡のものは埴は篠岡・美濃のものであり、皿は美濃のものである。第2号住居址の埴は釉かけが新しく、11世紀後半に位置するものである。緑釉についても篠岡古窯群のものではないかと思われる<sup>(4)</sup>。ただ第14図40の埴は京都系ではないかと思われる。

(神沢昌二郎)

#### 参考文献

- (1)「長野県東筑摩郡本郷村三才山七本松遺跡調査概報」松本県ヶ丘高等学校風土研究部 「信濃」第14巻第11号
- (2)「長野県塩尻市内田原遺跡調査概報」原嘉藤、山田瑞穂「信濃」第21巻第6号
- (3)「瓷器の道」(1)——信濃における灰釉陶器の分布——嶋崎彰一【名古屋大学文学部二十周年記念論集】 1968・12
- (4)愛知県陶磁資料館表示

第6表 坏血病分類表

計	環												環																							
	A (11.1cm以上)						B						B						C																	
	A1	A2	A3	a1	a2	a3	B11	B12	B13	B1	B11	B12	B13	B21	B22	B23	C11	C12	C13	C1	C11	C12	C13	C21	C22	C23	C31	C32	C33							
第1号位居址	1	1	4	3	2	2				2	1	(1)							1	1	1	1	2													
第2号位居址	1						2	1											1	(1)																
かじや橋渡橋	2	1	5	1	1	2	1	2										1	(1)		1	1	1	2												
橋	1	1	2	2														3	(R2)																	
第2号 居址	1						1	1	1	1	1	(1)	(1)					3	1																	
道橋外	3	2	5	4	5	2	4	2			2	(1)					4	5		6	5	2	1	1	1	1	2	50								
小計	5	3	13	15	11	7	4	2	4	2	2	(1)	(4)				6	6	2	11	2	3	2	3	3	2	1	2	120							
分類計	24						9	6			9	(6)					19	9	7	19	7	7	8	8	5	5	5	5								
合計 (6)	60 (48.8%)												24 (19.5%)												39 (31.7%)											
													(15.R1)												(13.R3)											
																									(13.R4)											

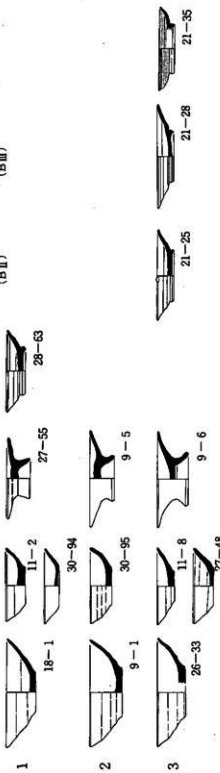
(注) \*口標高が同標高になるものを1、内筒するものを2、外筒するものを3とした。

○内のUは内環土脚1点のみなのであえて項目を設定しなかつた。

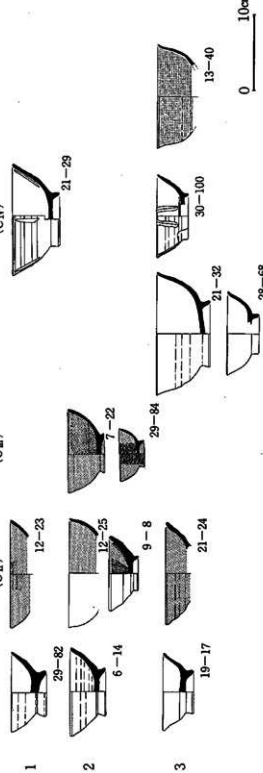
○( )内数字は尺取距離、Rは総歩数距離。この表における土脚数は全体の60.1%、尺取距離25.8%、総歩数距離4.1%である。

○口標高のわかるものをとりあげたので、最後一頁表、寸法図のグラフとは数が一致しない。

土師器环 (A) 土師器环 (a) 土師器皿 (BI) 灰釉陶器皿 (輪花) 灰釉陶器皿 (紋皿) 綠釉陶器皿 (BIII) 綠釉陶器皿 (BII) 綠釉陶器皿 (BIII)



土師器埴 (CI) 土師器埴 (内黒) 土師器埴 (黒色) 灰釉陶器埴 (CI) 灰釉陶器埴 (輪花) 綠釉陶器埴 (CI) 土師器埴 (CII) 土師器埴 (CIII)



0 10cm

第40图 环·皿·埴分期图

## 第5章 結 語

昭和54年度、松本市笹賀では小俣地区の田畑が県営は場整備事業の対象となり、同年11月、その工事前に同地区牛の川遺跡の発掘調査がなされ、平地部における縄文中期を主とする平安期に及ぶ数々の遺跡・遺構を明るみにして、多大の成果をおさめた。翌55年は笹賀神戸地籍30ヘクタールの広大な田畑が、県営は場整備事業の対象となった。神戸地籍はかつて地元の小松慶氏により、古代以前に所属する遺物の出土地点が20箇所余確認されており、11～12月にかけて工事前の緊急発掘調査が実施される。調査に先立ち現地踏査が行われたが、現況地目が全域にわたり水田であるため遺物等の表面採集は難しく、僅かに縄文期の打製石斧2、石鏃1、それに平安期の土師器、須恵器、灰釉陶器の各破片など数量を得たにとどまった。従って当初より調査結果に対しては、期待感のうすい不安があった。

発掘地は東西方向に長く、これに直交する南北方向の堰や道路のはしりがあり、地理的に3分割され、西よりA～C地区が設定された。この中、最も資料的に恵まれたのはB地区であった。遺物は平安期相当を主体とし、少量の縄文期中世末所属のものが得られた。又、遺構は主なるものとして、平安期相当の住居址2、鍛冶屋場及び関連遺構、墓址類が都合21等々であり、当初の予測を大きく上まわる成果をおさめた。

遺構のうち住居址は2を数える。第1号住居址は、その上部輪郭線が明瞭でなかったが、精査の結果明らかにしたもので、1辺が約6.0mの方形プランを示し、堅穴は表土面より約1mの深さを数える。床面は固い仕上げであったが凹凸があり、焼土の分布堆積が認められ、竈は北西の隅に築かれた砂竈で珍らしく、鉄分を多量に含んでいたため堅固であった。柱穴は調査最終日の雪ふる中で址内に3箇所認めたが、他に1箇所の所在が考えられるも追求できなかった。址内には覆土上層部より床面にかけて、おびただしい木炭化物やかやの炭化物が残存しており、ことに床面上には直径20～25cm程度の丸太材が焼け落ちた感じで検出される。一見して焼失家屋であることがわかる。これらの炭化物と共に土師器を主に少量の須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器の各破片、鉄滓等が得られた。ことに堅穴の西壁にたてかけた様におかれた完形の坏6枚の中、3枚は重ねられた状態であり焼失直前の生活の有様を、そのまま残すかの如くである。この住居址は、いずれにしても焼失家屋であるが、それが失火によるものか、あるいは意識的な焼却によるものかを推考するとき、遺物の在り方、焼失後の手入れが全く感ぜられない等から、後者によるものとの感を強くなる。2号住居址は、堅穴を形成する周壁の輪郭線を、明確につかむことができず、竈と床面の追求による、住居の規模を推測するにとどまる。それによると1辺6.4m余の方形プランを示すものと考えられる。床面は平坦で固く、土師器の内黒の坏などが出土した。竈は石組粘土づくりであり、その内外より土



師器の完形の坏や、灰釉陶器の高台付碗など出土する。

墓址遺構がA地区に3、B地区に17、C地区に1、都合21例の存在が確認される。以上の中約半数が火葬墓、他は土葬墓と思われるものである。火葬墓の中、特徴的な2、3の事例をあげれば、第6号墓址の如く墓墳内で遺体が直接火葬に附された感じのものがある。墓墳の底部径は約140 cmの円形で、焼土灰の堆積は約30 cm位であった。その内部に火焼骨が散乱し、人頭大の石10余個が含まれていた。又、副葬品として、文字の全く判読できない古銭2枚と、魔除けのための刀子が1本上面におかれていた。この刀子は鞘の部分に螺細細工が施されていた形跡があり、又、柄の部分にはベッコウも認められるという逸品で、葬送儀礼のゆきとどいた、有力者あるいは高貴な人の火葬墓を想像させる。Fトレンチ3区の溝状遺構の下より発見された第17号墓址は、約60 cm円形の焼土灰の分布を示し、その内部に約40 cmの円形に、こぶし大の礫と人頭大の石3個程が集められていた、この集石の北側には、土師器の坏3枚が伏せられた状態でおかれてきた。それなどは火葬された被葬者の魂がさまよわないようにとの、精霊封じの民俗的な風習を感じさせる遺構でもある。火葬墓の場合は、いずれも焼灰と人頭大の石数個～10個を伴う事例が多かった。土葬墓と思われるものは、砂利及至こぶし大の礫を、長さ150～250 cm位、横巾100～150 cm位の長楕円状に敷き詰めたもので、その石の堆積は20～30 cmを示すものが多く見受けられた。内部に副葬品を伴う事例はなかった。

その他遺構として、C・Dトレンチの各6区にわたり楕円状の落ち込みが認められる。その内部に遺物が集中的に検出される。遺構の規模は南北方向の長軸が175 cm、東西方向の短軸が約90 cmで、落ち込みの深さは検出面より15～20 cm程だった。内部の遺物としては、底部近くの立ちあがりの直径が約58 cmを記す須恵器の大形甕、土師器の坏（内黒を含む）、灰釉陶器（段皿を含む）等の各破片多数と、鉄滓数個、角釘1、骨粉、木炭粉末等々が出土する。

以上、平安期の遺構について語ってきたが、その前後関係を考察するとき、遺物・遺構等の検出状況等から、年代的にはほぼ10～11世紀にわたるものとみられ、住居が営まれた頃を最初とし、続いて墓地、後に鍛冶屋場等の生活に移行したものと考えられる。

遺物としては縄文期の打製石斧6個、石鏃3個の他、土器の検出は認められなかった。然しこれらの遺物から、発掘地の近くに縄文期の集落も、存在したのではないかと推測させる。降って平安期に入ると、土師器の坏（内黒を含む）、内外黒色処理の耳皿や坏・鈿釜。須恵器の同心円文を残す大形甕、胴部に隆帯をめぐらす甕。灰釉陶器の壺、坏、皿、火舎、広口有頸壺。緑釉陶器の皿、段皿等の土陶器類。刀子、紡錘車、鉄環、鉄釘、小鉄器等の鉄製品と鉄滓。青銅製のミニ仏像。開元通宝・元豊通宝等の古銭。磁石等が出土する。これらの遺物のうち特殊なものをあげると、土師器の耳皿がある。この耳皿は鍛冶屋場の火床から東側へ約2 m程の地点から発見されたもので、周辺には前記上陶器類の破片が多く混在した。その様な耳皿は、松本市大村の横田作重氏方の塚畑から発見された、平安期の鍛冶屋場遺構内からも出土しており、器形、大きさ、色調等がほぼ同様で金山

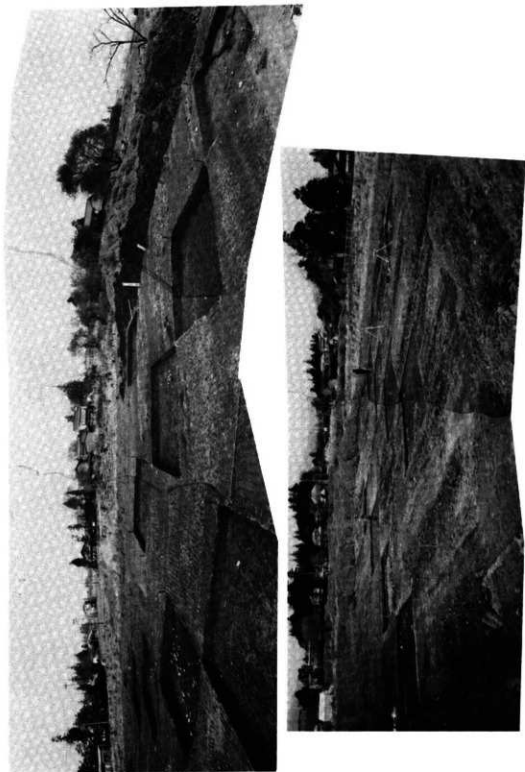
祭祀関係の供献用具かとも推測される。然しその用途など今後の資料にまちたい。ミニ仏像は一部変形はしているが、完形の地藏菩薩である。延命地藏を形どった立像で、法量は総高が5 cm、像高が4 cm、身の横巾が約1.4 cm、奥行が約1 cmを示す。その仏像は製成後再燃された、いわゆる二度焼の痕跡があり、肌の色が変色してざらつき、台座の前面が上向きに変形している。又、その仏像を仔細にみると、背面下部に突起状の部分を認める。これは、この仏像が合せ型の鋳型によって鋳造されたものであることがわかる。この突起部は注湯口から湯管を通り、鋳型へ通ずる短かい通路にあたる、堰の部分にあたっているわけで、その部分が削り落されずに残されたものである。この仏像がなぜここに出土したかについては、興味あることであるが、ひとつの見方として、この地が墓地として活用された頃、その墓地の端に廬（いほり）があり、これに墓守りが詰めていて、礼拝の対象のひとつとして存在したのではないか。あまり出土事例をきかないが、周辺の遺構や伴出した遺物が、すべて平安期に所属するものであり、同期に位置づけるのが妥当と考える。

中世末の遺物はA地区を主にB地区の西側の一部に、それぞれ微量検出された。それらは内耳土器類似土器片や陶磁器片等で、特筆されるものはなかった。

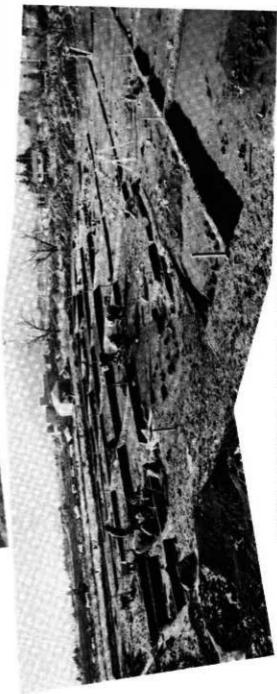
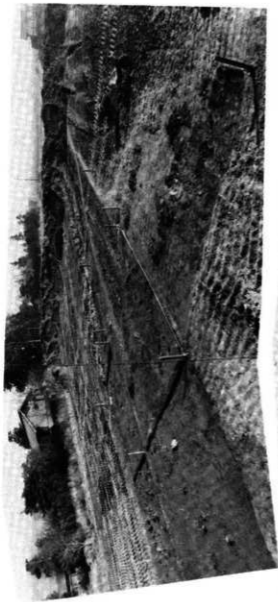
神戸遺跡の発掘は11月10日より12月23日までにわたって行われた。11月中は作業も容易であったが、12月に入ると降雪に見舞われたり、連日、寒い吹きさらしにあてられ、零下10度をこえる酷寒に身をさらしての作業となり、互いに体調をくずし、足裏に軽い凍傷をきたしながら、尚、厚く凍結する発掘地にたつて調査を最後まで続行された調査員各位や、作業員の皆様方に、ここに深甚なる感謝の意を表する。

(大久保知巳)

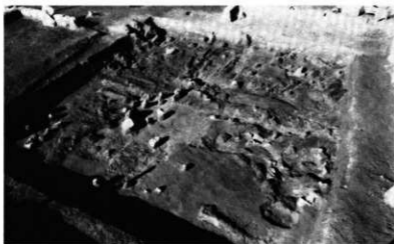
# 圖 版



第1図版 発掘地点全景 (1) (上 A地区南より 下 C地区南東より)



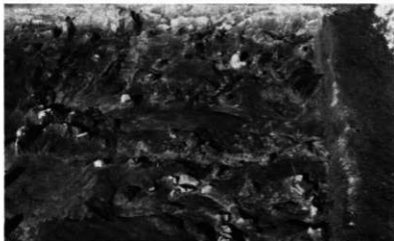
第2図版 発掘地点全景 (2) (B地区 上 南西より 下 北東より)



南東より



東より

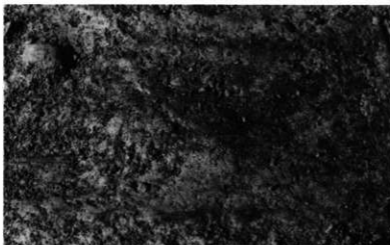


北東部分

第3図版 第1号住居址 (1)



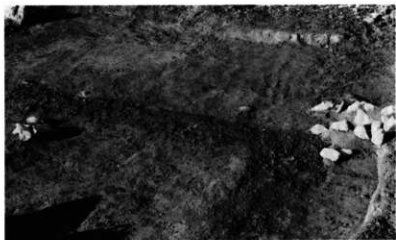
柱状炭化物  
出土状況



ムシロ状炭化物  
出土状況



黒色土器  
出土状況



検出中



カマド周辺



カマド

第5図版 第2号住居址



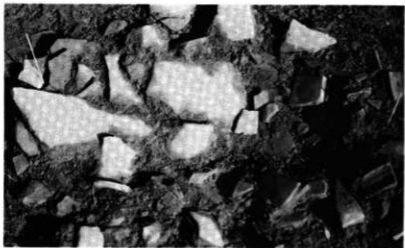


検出中



検出中

第6図版 かじや塚遺構 (1)



遺物集中出土状況



同上

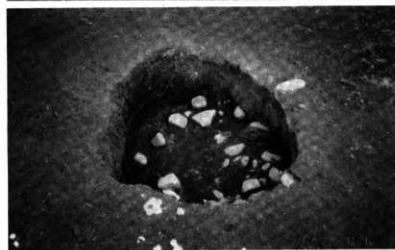


同上

第7図版 かじや場遺構 (2)



第1号墓址



第2号墓址



第3号墓址

第8图版 墓 址 (1)



第4号墓址

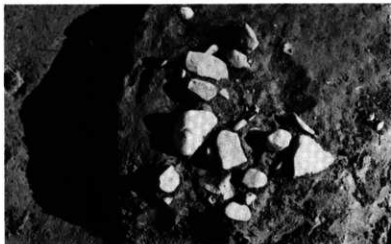


第6号墓址

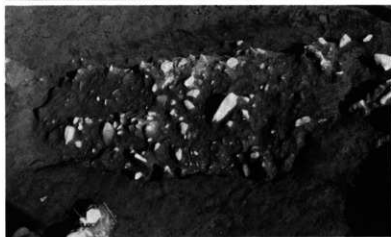


第7・9号墓址

(第7号 手前グリット集石  
第8号 その裏グリット中  
中央印)



第8号墓址



第12号墓址



第13号墓址

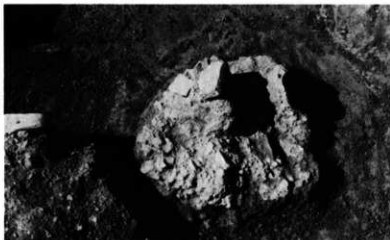


第15号墓址  
第14号墓址  
第13号墓址 第20号墓址

第14号墓址



第15号墓址



第16号墓址



第17号墓址



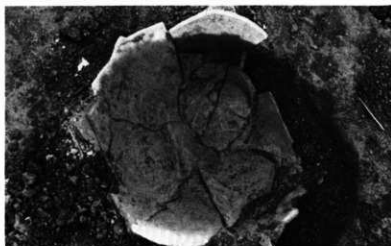
第18号墓址



第20号墓址

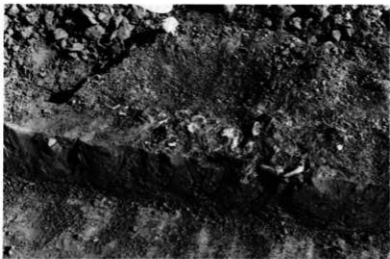


同 掘り上げ中

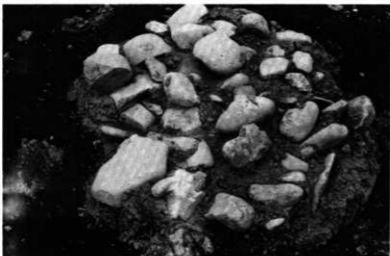


同





第19号墓址  
(断面)



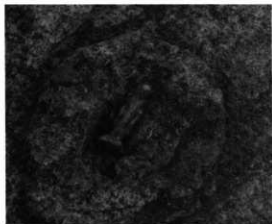
第21号墓址



第1号住居址  
西壁环出土状况



B地区  
C-6  
灰釉陶器出土状况



B地区  
G-2  
铸造钹出土状况

第15图版 遗物出土状况 (1)



B地区  
F-2  
紡錘車出土状況



B地区  
B-3  
砥石出土状況



B地区  
G-4  
不明石造物出土状況

第16図版 遺物出土状況 (2)



遺跡南東の  
樺の大木(右端)



同上  
切られてなくなった



作業中間  
説明スナップ



1



2



3

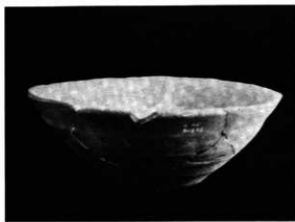
第18图版 第1号住居址出土土器 (1)



4



5



6

第19图版 第1号住居址出土土器 (2)



7



8

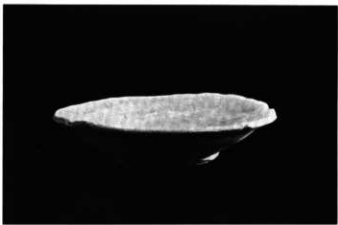


9

第20图版 第1号住居址出土土器 (3)



10



12



13

第21图版 第1号住居址出土土器 (4)





14



15

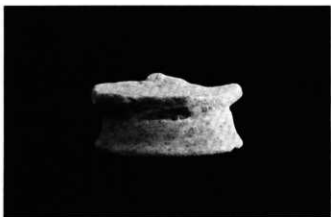


18

第22图版 第1号住居址出土土器 (5)



20



21



22

第23图版 第1号住居址出土土器 (6)



24



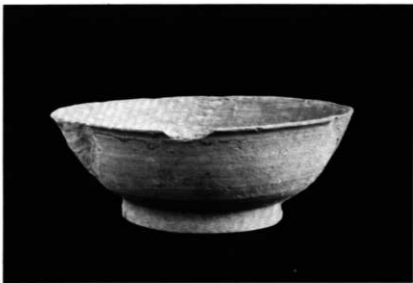
25(上)・26(下)



同上



27

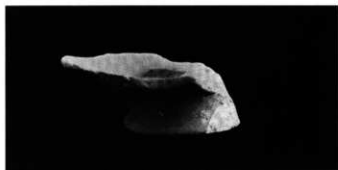


30

第25图版 第1号住居址出土土器 (8)



1



5



6



7

第26図版 第2号住居址出土土器 (1)



8



10



11

第27图版 第2号住居址出土土器 (2)



2



3



4

第28図版 かじや場遺構出土土器 (1)



6



7

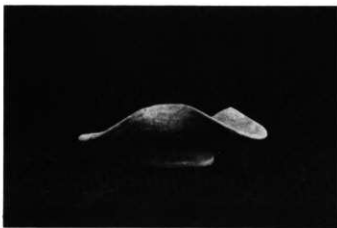


14





16



同上



17

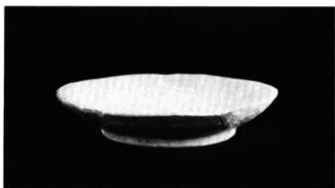
第30図版 かじや場遺構出土土器 (3)



27



33



39



40



42



43



44



同上



8



9



10

第33图版 第16号墓址出土土器 (1)



11



12



13

第34图版 第16号墓址出土土器 (2)



14



16



15



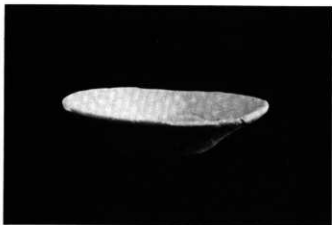
22

(第18号墓址)

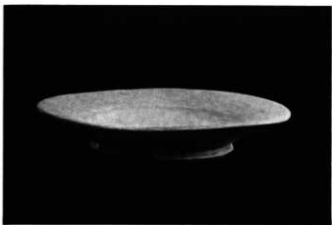
第35图版 第16·18号墓址出土土器



23



24



25

第36图版 第20号墓址出土土器 (1)



27



28



29

第37图版 第20号墓址出土土器 (2)





30



32

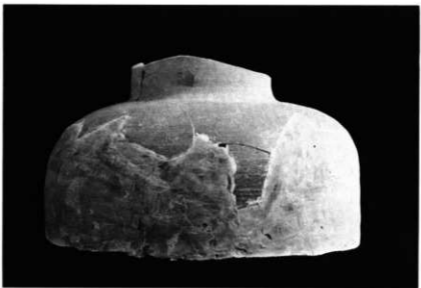


35

第38图版 第20号墓址出土土器 (3)



33



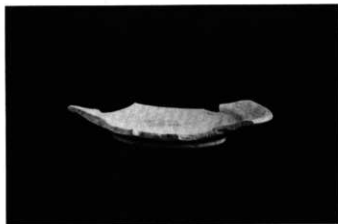
38



1



2



5

第40図版 遺構外出土土器 (1)



9



10



14



16



17



19

第42図版 遺構外出土土器 (3)



28



33



34

第43図版 遺構外出土土器 (4)



36

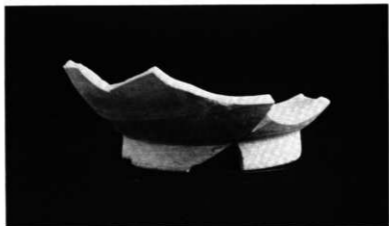


43



44

第44図版 遺構外出土土器 (5)



45



46



48

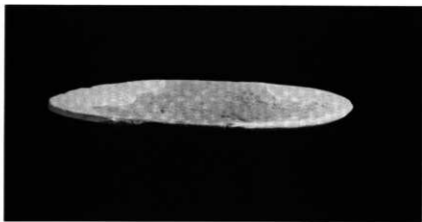




50



55



56

第46図版 遺構外出土土器 (7)



57



58

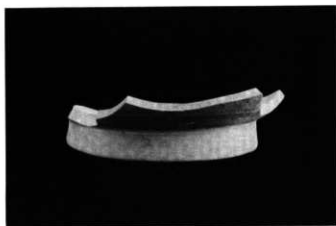


70

第47図版 遺構外出土土器 (8)



71

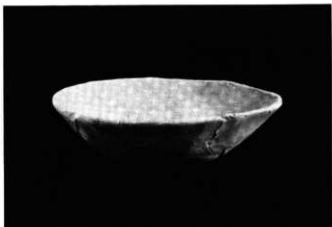


72

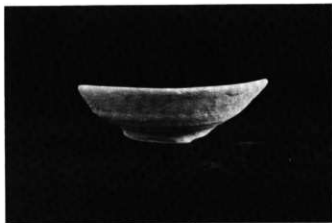


73

第48図版 遺構外出土土器 (9)



74



75



95



100



105

---

松本市文化財調査報告No.21

—松本市笹賀神戸遺跡緊急発掘調査報告書—

昭和56年 3月20日 印刷

昭和56年 3月31日 発行

発行 長野県中信土地改良事務所  
松本市教育委員会  
印刷 電算印刷株式会社

---

